

◎同神社一覽

神社名	祭神	所在地	年創立	摘要
老尾神社	物部小碓大連	匝瑳郡生尾		郡内式内社の一にして古くは香取氏其神官たりき。上總一の宮も同號の神なれば祭祀の理由同一ならん。蓋し古書に所謂玉浦は此神に基く名ならんと云へり。
玉崎神社	海上郡飯岡町永井	海上郡飯岡町永井		當地方の名祀にして夏期の大祭は最も盛んなり。
海上八幡宮	應神天皇 神功皇后	同 海上村大字		諸國の府祠と同じものにて匝瑳連の裔國府に倣うて祀れるなりと云ふ。
側高神社		香取郡大倉村	景行天皇 時代	香取第一の攝社にして祭祀に鬩撫の祭と云ふ奇なる風あり。
六所神社	物部小碓大連	同 中村		諸國の府祠と同じものにて匝瑳連の裔國府に倣うて祀れるなりと云ふ。
香取神社	經津主神	同 香取町		當社の高丘は之を五峰の山と云ひ神社は其内の一なる龜甲の丘にあり境内幽靜にして眺望絶佳下總第一の大社なり。

修學族行案内

下總國神社一覽

大戸神社	手力雄命と云ふ。	同 大戸村		香取神宮第一の末社なるも現今は全く祭祀を異にし縣社に列せらる。
神崎神社	檀面 根足 尊尊	同 神崎町の丘		地理志料に當寺は小松神なりと云へり。境内小なれ共樹木鬱然として敬慕の念を起さしむ。
小御門神社	藤原文貞公	同 小御門村名古屋	明治十五年	格別官幣社なり、祭祀の年月若しと雖も縣下有名のものとなれり。
麻賀多神社	伊都許利尊	印旛郡公津村栗山	應神天皇 時代	當郡式内神社の一なり、上記の事は佐倉風土記に見えたり。神祠は二所に在りて祭神を異にする。
蘇賀比咩神社	蘇我氏の祖神	千葉郡曾我野村		當地の春日明神と稱するものに於て郡内中の式内神社なり。
千葉神社	千葉氏の氏神	同 千葉市内	王朝時代	舊時は壯觀を極めたる由なるが明治七年の大災後頗る衰微せり。但し境内は甚だ廣し。
寒川神社		同 三山村二宮		郡内官祀の一にして延喜式の神社なり。境内樹木多く、頗る雅致ありと云ふ。

船橋大神宮	葛飾八幡宮	六所神社	茂侶神社	頼政神社	雀神社	三島神社
豊受大神	應神天皇			源頼政		
東葛飾郡船橋町	同八幡町	同真間山弘法寺の北方	同流山町の北方三輪山	猿島郡立崎	同古河町	同香取村水海
社は高丘の上に在り、境内廣潤にして樹木多し。	創建の年月甚だ古きが如く社内廣潤にして大樹多し舊は元享元年の鐘ありしが如し。	當國の惣社にして中古國司の總國官社遷拜の所とす。	當郡に於ける式内の官社なり。	頼政關係のもの若くは其塚を美とすもの遺蹟として建設せるに似たり。	野州雀宮の神を移せしならんも年月不明なり社内に弘治二年の鰐口及び元和九年の灯笼あり。	郡内の古祠なるも創建年月不明なり但し當社の事は道興准后の回國雜記にも見えたり。

妙光寺	淨明寺	日本寺	寺院名
同	同	法華	宗派
弘安年中	不明	天正年中	建立年代
日寺傳朝	不明	北條氏政	建立基及者
同多古	同	香取郡中村	所在地
摘要			

◎同寺院一覽

百首歌奉りし時
木綿かけて御世をぞいのる榊とる
八十氏人のおなじ心に

權中納言公雄

下總國寺院一覽

清光寺	結縁寺	龍腹寺	本行寺	大巖寺	千葉寺	大日寺
淨土	新義	同	法華	淨土		
天正以前か	不明	同	文明年中	永祿三年	傳説年代 和銅二年	舊説年代 天平寶字元
月峯上人	深栗頼重か	不明	日泰上人	原胤榮	行傳説 基	舊説 仁生法師
同南 本佐倉	同北 船穂村	同本郷村 中根の西	千葉郡濱野 (千葉の南)	同蘇我野 北村生實村の	千葉郡千葉 町	同
古寺の一なるを以て茲に擧ぐ。	當寺に源頼政の墓あり佐倉風土記に考證して深栖(頼政の弟)の居所ならんかと云ふ寺中に元享の斷碑嘉三年の銅佛あり。	本寺は大同年間の建立と云ひ傳ふれども信す可からず所蔵の銅棟札には嘉吉二年の銘あり。	日泰は上總七里法華の化導者なり。	胤榮は小弓の城主なり、當寺は徳川家の歸依を受け東國十八檀林の一に居れり。	當寺の建立及び由來等甚だ古く且つ多しと雖も思ふに千葉氏隆盛の頃に造りしものならんか。	舊説信す可からざるも寺中に千葉常兼以下十六代の墓あり又平良文將門以下を祀れる祠あり。

修學族行案内

觀福寺	大慈恩寺	正明寺	新勝寺	龍角寺	超林寺	東勝寺
寛平年中	文永年中か	不明	同	天台	不明	同
寛平年中	文永年中か	不明	同	寺傳 和銅二年	不明	同
尊海	眞源	海上家か	不明	同	同	同
同南 佐原の牧野	同西大須 賀村吉岡	海上郡船木	印幡郡成田	同酒直及 び麻生の間	同公津村	同公津村
寺に弘安四年の佛體を初め古器あり、同人は眞淵の弟子にて其子に伊能忠能、謙則の二子あり。	舊時は有名の古刹にして多寶塔の如きは厩應中のものなりと云ふ、而も今僅に殘字を存するのみ。	寺中に康曆二年の古碑あり。	當寺の不勲尊は關東名代の家傳と稱せらるれ共年代餘り古からず、成田參詣記には永祿九年入佛とあり。	當寺創立の古くして佛像の勝れたる由は佐倉風土記に見ゆれ共確否不明なり。	寺内に觀應二年千葉貞胤の墓碑あり。	義民宗吾の墓は當寺に在り。

下總國寺院一覽

永井寺	大聖院	隆岩寺	常教寺	本土寺	東漸寺
臨濟	曹洞	淨土	眞宗	法華	淨土
寛永三年	元龜年中	慶長三年	延慶二年	文永年中	文明十三年
佛光禪師	足利晴氏	炭道上人	唯善上人	陰山某	經譽上人
同 船渡町	同 新町	猿島郡古河	同 二川村	同 平賀	同 小金所
永井侯の建立なり。	晴氏の室は北條氏康の女なり、元龜元年氏康卒せしにより冥福の爲め晴氏之を建つ、初め古河の城中に在りしが寛文の頃此地に移す。	當寺は小笠原兵部少輔が岡崎三郎信康菩提の爲めに建立せしものなり、寺内に慶長の古鐘あり。	唯善上人は親鸞聖人の孫なり、當寺は坂東七大寺の一にて境内清酒、又郡中の一勝區と稱するを得可し。	當寺は郡の小目代陰山某、日蓮に歸依して建立せるもの境内静閑にして風趣多く又建治文明の古鐘あり。	關東十八檀林の一にて舊は根木内村に在りしが第五世行譽上人の時茲に移す、境内甚だ幽靜なり。

修學旅行案内

萬満寺	總寧寺	弘法寺	法華經寺	來迎寺
鎌倉時代か	曹洞	同	法華	淨土
鎌倉時代か	永徳三年	建長年中	弘安年中	不明
其觀上人	佐々木氏頼	日頂上人	土岐播磨守 俗名日常	中興 滿譽上人
同 馬橋村	同 國府臺	同 市川眞	東葛飾郡中山村	同
當寺建立の事は鎌倉大納言以下大夫たり蓋し千葉頼胤が頼朝以下の將軍並に千葉頼胤の苦提を祈る爲め造れるものなり。	永徳の創建は江州にて天正三年北條氏政之を下總關宿に移し、寛文三年今の地に移せり。	池上本門寺の末派なり、舊は眞言なりしを以て弘法寺の名あり、境内廣潤にして眺望殊に佳なり。	當院は天平の國分尼寺ならんと云ふ、舊名本妙寺現今四大本山の一なり、建物中五層塔は元和八年の再修、鬼子母神堂は鎌倉の古堂法華堂は祖師說法の堂なりと云ふ。	中興は天正年中なり相馬日記に「千葉氏の五輪七基ありて應永、永享の年號など見ゆる由を載す、又元徳の鐘あり」と云ふ。

下地國寺院一覽

西 林 寺	乘 國 寺	安 穩 寺	弘 經 寺	孝 顯 寺	稱 名 寺
禪 宗		曹 洞	淨 土		眞淨 宗土
應 保 年 中	永 正 年 中	至 德 年 中 か	文 祿 以 前	永 正 年 中	建 保 年 中
慈 念	結 城 氏	源 翁 和 尙	存 把 上 人	曇 聚 和 尙	眞 佛
北相馬郡 守谷町の南	同 小 塔	同 鍛 冶 町	同 西 町	同 立 町	同 浦 町
相馬胤繼之中興すと云ふ。	開基は松庵宗英和尙なり、願主 乘國は即ち結城氏廣なり、蓋し 氏廣のことは結城家譜に見えた	今も寺内に源翁の墓其他拂子の 類あり、寺は頗る衰微せるが如	文祿四年結城秀康之を再建す、 後幕府白旗流關東十八檀林を定 むる時常寺を以て第一とす。	一名永正寺と云ふ、結城政朝の 墓あり、俗に之を大將塚と呼べ り、當寺には大桂禪師(興豐建 隆)の住せしこと聯燈録に見え たり。	眞佛は親鸞聖人の弟子にて當寺 は近世一向宗關東七大寺の隨一 と呼ばる。

修學旅案行内

華 藏 寺	東 昌 寺	勝 願 寺	光 了 寺	鮭 延 寺	宗 願 寺
臨 濟		同	眞 宗		眞淨 宗土
足 利 初 世 か	文 明 八 年	鎌 倉 時 代	建 保 年 中	德 川 時 代	鎌 倉 時 代
結 城 氏	築 田 持 助	善 性 房	西 願	鮭 延 の 家 臣	道 祐
結城郡結城 塔下町	同 五 霞 村 大字 山王	同 香 取 村 大字 磯邊	同 新 郷 村 大字 田中	同 勝 鹿 村	同 燈 匠 町
當寺の古鐘は應永乙亥のものに て今武州鴻巣の勝願寺に在り之 れによれば當時の願主は結城直 光にて此鐘は再度のものなり。	築田は關宿の城主にして持助は 河内守と云ふ、同家の善提寺な ること文明八年の鐘銘に見ゆ。	關東七箇寺の一にして由來は上 關の如しと云ふ土地幽靜にして 閑雅なり。	當寺は舊天臺にして北葛飾郡高 柳村に在りしを後此地へ移せり と云ふ、寺中に發經の妾靜の舞 衣なるものを蔵す。	當寺には熊澤蕃山の墓あること 前記の如し、鮭延は土井氏の臣 なり。	道祐は親鸞の弟子なり、當寺は 即ち二十四輩の一なり、二十四 輩とは門弟二十四人の遺跡を云 ふ。

晚鐘

里とほき山路の末に行くれぬ

寺はいづくぞ入相のかね

鄭巢

林疎多暮蟬。師去宿山煙。古壁燈薰畫。秋琴雨慢絃。

(七) 常陸國

常陸國は北東の大部關東平野に連り、西北の部分は山嶽重疊す、而して此山脈は大別して三とし、其國の中央に南走するものを八溝山脈と曰ふ、即ち常野、磐、三國の間に聳え、更に那珂川を越えて雞足、佛頂、筑波の諸山となるものは是れなり、次は久慈川、里川兩川の間を走る山系にして、國境矢祭山より南走

して男體、武弓、西金砂の諸山に連るものは是れなり、次は即ち多賀山脈とて磐城の國境より一は東に走りて勿來關に達し、一は西南に向て飯倉、續石の諸山となり、又花園、高鈴、真弓の諸山を経て久慈川に盡るものは是れなり、以上の諸山脈は主として噴出岩中の深成岩より成り、平野は即ち房總三州と同様第三紀第四紀の地層を示せり。

鹿島社にて

藤原時朝

千早振神代の月のあらはれて

心のやみは今ぞはれぬる

鹿島

大槻磐溪

湖山十里紫霞濃。一棹清流載酒從。莫是仙真棲隱處。雙松夾立鶴來峰。

◎國內高山一覽

修學旅行案内

山名	高さ	摘要
筑波山	八百七十六米突	此山平原の中に屹立し、四邊之に次ぐものなし、山頂二峰あり、高さ相若く、而も女體少しく高し。
豊凶山	四百六十二米突	筑波山の南西に突出せる一の高山なり。
三角石山	七百十米突	男體山の北に有る別峰にして一名劍峰の稱あり。
蒼葺山	五百三十米突	筑波山脈中其北方に連なる一山にて山尾の正東に位せり、又此南に富士根と云へる奇峰あり。
葦穂山	六百二十八米突	今足尾山と云ふ、筑波山北方に聳ゆる高山なるが、古人は其名を此邊一帶の山名に用ゐたり。
加波山	七百餘米突	又蒲山とも書く、筑波山の東北に峙つ高山にして、足尾山の眞うしろに在り。
雨引山	四百米突	本木驛の東北に峙つ高山にして山腹に坂東巡禮第四の觀音堂あり。

常陸國高山一覽

山名	高さ	摘要
閑居山	二百二十米突	筑波村の西嶺に續きて、楯現山の西南に當れり。
大岩山	三百四十四米突	筑波山脈の東南端に突出せる一山にして古生層の岩石より成る。
愛宕山	四百米突	新治郡園部村真家の北西に當る高山にて古生層の岩石より成れり。
龍神山	二百米突	高山の部類に屬せざれども大岩巨石露河として牛腹に群族し、頗る神靈の觀を呈し、古來其名高し。
吾國山	五百十八米突	西茨城郡木戸の南嶺にて山質石灰岩は晶質に變じて一異相を示せり。
佛瓶山	約百四十三丈	同郡片庭村に在り山上廣湖にして四方嶮岨山麓に楞嚴寺ありを以て其名高し。
八瓶山		同郡徳藏村に在り、四面削るが如く、頗る嶮峻なるを以て其名高し。
鷄足山	四百五十米突	常野の國界にして七會の西に在り、此山脈は凡て古生層の部類に屬し山頂に石理の鷄足に似たるものあり、故に山名とす。
男體山	五百四十米突	同郡夫戸町の西南に在り、俗に御嶽と呼べり。

立	高	八	三	眞	鷲
割	鈴	溝	鉛	弓	子
山	山	山	山	山	山
六百十餘米突	六百米突	千〇三十五米突	九百三十米突	四百五十餘米突	四百五十餘米突
同郡高萩の西に位する雄峰にして多賀山脈に屬す、風土記に載する角枯山と云ふは是れなりと云ふ。	多賀郡助川驛の西北方に位する高山にして鏡乳石の洞穴近傍に多く存せり。	久慈、那須、白河三郡の交界にある高山にして古生層より成れり。	同郡徳田の東北嶺にして片麻岩層より成り、阿武隈山系に屬す、蓋し久慈、多賀、白河三郡の交界となれり。	那珂郡大岩高部等の西嶺にして岩石は近傍の諸山と共に古生層に屬せり。	久慈郡矢村に屬す、此山は古生層下部の岩石(輝石)中に一條の石灰岩層を挿む即ち眞弓突水石とて世に名高きものなり。

山 中 廬 玉 川
 飢拾松花渴飲泉。偶從山後到山前。陽坡草軟厚如織。因與鹿麕相對眠。

◎同 河川及湖沼一覽

巴	浪	北	霞	小	牛	滑	川
逆	浦	浦	浦	野	久	沼	川
川	浦	浦	浦	川	沼	川	川
長七里	方三十町許	南北六里東西最廣三十町餘	面積約十方里周圍三十六里	長九里	長五里	長五里	長五里
源を西茨城郡岩間村に發し、東南に流れて北海に注ぐ。	北浦の南、與田浦の東にして北利根川に來會する江灣を云ふ。	行方、鹿島兩郡間の湖沼にして其内に注ぐ河流は巴川を最大とす。	當國の南邊に位し、行方、信太の兩郡に跨り、北部は兩岐をして一は高濱に達し、一は戀瀬川の河口となる。但し牛堀を以て津口となし利根川に注ぐ。	源を筑波郡に發し、稻敷郡の中央を貫流して霞浦に入る。	一名園部川と云ふ。源を新治郡山前の愛宕に發して霞浦に入る。	南北二里東西最廣部十町	稻敷郡に在り、筑波郡の野水之に注ぎて更に小見川に入る。
摘 要							

山田川	薩都川	久慈川	緒慈川	那珂川	入野川	仙波沼	濁沼	穴戸川
同九里	同約十二里	同約十三里	同七里	同四十四里	同七里	同七里	同約十里	同約十里
源を東西金砂の溪流に發し、南下して久慈川に入る。	源を三鈴室山に發し、太田の東を流れて久慈川に入る。	源を陸前白河郡皮子原、旗宿等の山中に發し、棚倉邊より南流し、久慈郡に入て東流海に入る。	源を鳥子山に發し、那珂郡野口村の東南を経て那珂川に入る。	源を下野國那須郡に發し、常陸に入りて茨城、那珂二郡の間を流れ東三里にして海に注ぐ。	源を西茨城郡鹽子及び赤澤に發し、屈曲して那珂川に入る。	源を西茨城郡鹽子及び赤澤に發し、屈曲して那珂川に入る。	一名小鮫川、藤間川と云ふ、源を笠間の奥に發し、曲折して濁沼に入る。	源を笠間の奥に發し、曲折して濁沼に入る。

大北川 同六里 源を久慈郡花園山の西北和尙壇山に發し、東南に流れて海に入る。

西湖

東坡

水光激瀲晴偏好。山色朦朧雨亦奇。若把西湖比西子。淡粧濃抹兩相宜。

江天晚望

譚成王

悠然清思渺江天。不在眠鷗立鷺邊。說與雲山都不應。數聲柔櫓乍歸船。

霞浦舟中

大窪詩佛

扁舟借得滿帆風。恰似飛禽翔半空。水與長天一秋色。筑波山立碧波中。

同市及名邑一覽

號一邑名及市國陸營

麻生町	玉造町	小川町	高濱町	石岡町	柿岡町	土浦町
同	行方郡	同	同	同	同	新治郡
四千	二千五百	四千餘	三千餘	一萬三千	三千五百	一萬六千

郡の西南に位し霞ヶ浦の北端に在り。當國第二の都會地にして南に櫻川を帯び、西は霞ヶ浦の支瀆を控ゆ市街整然として商業頗る繁榮せり。

郡の西北方に在り。當地は春日局の子稻葉正勝の封邑なりしが、後蒲川家の所領となれり。今日は町と云へども甚だ衰微せり。

郡の東南部に在り。舊國府の地にして商業繁盛、且つ醬油清酒の醸造を以て名あり。

郡の南方に在り。此地往古は清浄佳處にして遊賞に適せり。汽船の便あるが上に霞浦の要津に當るを以て頗る繁榮せり。

郡の東方霞浦の北岸に在り。當所は町の名を存すれ共實は一邑村と見えず。然れ共歴史には古き郷と見え、永徳、永和等の古文書に見えたり。

郡の北西にして霞浦に接す。郡中の一小都會にして繁華を致せり。

郡の南端に位し霞ヶ浦の東岸に臨む。舊新莊氏の封地にして今郡役所を置、汽船ありて交通に便なり。

内案行旅學修

筑波町	北條町	江戸崎町	龍崎町	浮島村	名稱
同	筑波郡	同	同	同	所在地
三千五百	三千五百	五千五百	千三百	千三百	人口
筑波山の腹に在り。	筑波山の下方に在り。	郡の東南端に在り。小野川に接す。	郡の西部に在り。低地に位す。	郡の東方霞浦の南西に在り。	位置
坂路に因て市街をなす、常山の登山者多きを以て土地繁榮せり。	郡中の大邑にして古くは多氣と云へり、即ち多氣大掾の故墟なるを以て大を致せるに似たり。	土地僻在して交通便ならずと雖も小野川より霞ヶ浦に通ずる舟楫の利あり。商業盛にして郡中の一小都會をなせり。	輕便鐵道を布設せるにより交通便なり。雖も今や常磐線は佐野驛より此地迄にして大層乏しく商業盛んならずと雖も、鐵道は佐野驛より此地迄に主として西南方に集る。	陸地を距る六町、全島長さ七十町、幅最廣の塙所にて十二町あり、人家は主として西南方に集る。	摘要

修學旅行案内

磯濱町	大洗町	笠間町	鉢田町	大船津	鹿島町	潮來町
同	同	茨城郡	同	同	鹿島郡	同
		八千	二千五百			五千五百

郡の南端にして古來有名の地にして最も股賑を極む。又風景に富むを以て八勝の詩歌多し。

郡の南東に舊は此地繁榮せしならんが今や大船津の便なる爲め衰微して見るに足らず。

同北浦の濱に臨み銚子、鉢田間の汽船日々當所に寄泊するを以て土地繁昌せり。

郡の北方東端に郡内第一の都邑にして郡役所以下皆物輻輳せり。汽船の便あるを以て貨物の積や東方に當國の一名邑にして市街股賑を極む位して山間に在り。舊時は牧野氏の居地にて今郡役所以下を茲に置けり。

郡の東端に在り。此地は風光の明美なるを以て夏期の遊客殊に多し因て都市名邑と並ぶ可からざるも廣く世人に知らるゝを以て茲に擧ぐ。

郡の東方太平洋岸に在り。郡中の一都會にして頗る漁業の盛を極む。

常陸國及名邑一覽

水戸市	湊町	平磯町	大宮町	太田町	大子町	助川
同	那珂郡	同	同	久慈郡	同	多賀郡高給村
三萬五千	一萬三千	七千	二千五百	九千餘	七千餘	

郡の北端に位し仙波沼に溢む。市の幅員は東西一里八町、南北十五町四十間之を上市、下市の二區に別つて置けり。當國第一の大都會たること人の能く知る所なり。

郡の東南隅に在り。市街は南北一里、東西三十二町あり。下總銚子に比すれば稍や小なり。商業隆昌なれ共漁業は殊に盛大を極む。

同湊町の東北に在り。湊町を距ること一里、縣下第一の漁業地にして且つ海水浴に適せり。

郡の北東にして久慈川の岸邊に在り。山道の一驛に過ぎざれば共此近傍の都邑たるを失はず。

郡の南方に在り。當國北偏の名邑にして富商多く、北部の物産皆な茲に集まれり。

郡の北方に在り。山間の一都邑にして近村の物産皆な茲に集るを以て町家股賑を極む。

郡の東岸に在り。海濱の一村なれ共鐵道開通以來高等旅館の設備あり又別荘ありて海水浴場中有數のものとなれり。

神社名	祭神	所在地	年創代立	摘要
筑波神社	伊伊井丹尊	筑波山波半腹郡	不明	常陸の神を官社となし又御位を授くること弘山後國史に散見す。延喜式筑波山神社坐のありしに當りては共右に山坐のありしを神事なるに設けたるものなる。後世拜所に設けたるものなる。
大杉神社	大己貴命	稻敷郡阿波村	同	社は市街の端に在り毎年春期の候は參詣者頗る多しと云ふ。
楯縫神社	彦狹知命	同 木原村	同	舊信太郡中の式内神社にして、同郡東三十三村の鎮守たり。ち之を一の宮と云ひ、竹來の神を二の宮と云へり。

閩門春盡落花紅。欲問鄉書望過鴻。百事無成親已老。等閑三十一春風。

◎同 神社一覽

川尻	高萩	大津	平瀨
同 豐浦町	同 萩原町	同	同
三千五百	三千三百	九百餘千	二千五百
同	同	同	同

〔濱街道中の名驛にして漁業盛んなり。隨て鯉節鹽辛は此地の特産なり。郡の中央にありて郡役所を置けり。海水浴に適するを以て夏期は避暑の客最も多し。〕

〔平瀨町の南方二里にあり漁業盛んなる爲め鯉節、乾鮑等の特産物を出す。〕

〔磐城との國境にして船前停繫の好灣あり。且つ土地幽趣なるを以て遊覧の客多しと云ふ。〕

道助法親王

草枕ひと夜の露を契りにて
袖にわかるゝ野邊の月影
春日客懷

頼山陽

常陸國神社一覽

石都々古和氣神社	白波神社	薩都神社	佐竹諏訪神社	長幡部神社	稻村神社	静社
				手力雄命		
同宮	同羽	同	同	同	同	同
宮川村字	同村字白	里宮村	新宿	機初村	久慈郡佐竹村字天神林	静内村

久慈郡に於ける式内神社の一あり。今俗に志津明神と云ひ、那珂三十三村の鎮守として二宮の稱あり。

久慈郡の式内神社なり、其官社に預り授位の沙汰ありしこと、嘉祥二年、仁和元年等に在り、郡内式内神社の一にて、創始の事は風土記に見えたり、當社は源頼朝名高し。

崇神天皇時

文治年間

當社は佐竹秀義、源頼朝に從て奥州に出征せし後、信州の諏訪神を勧請せるものなり。

式内神社の一にて、風土記にも見えたり、當社授位の事は續日本後紀、承和十三年の條に載せたり。

郡内式内社の一にて、貞觀八年授位の事あり。

今近津明神と云ふ式内神社の一なり、陸前國白河郡の分、承和五年授位の事、國史に見えたり。

修學旅行案内

立野神社	佐伯神社	酒列磯前神社	阿波山上神社	藤内神社	建借間神社	常磐神社
武甕槌命		少彦名命		經津主神	健借間命	徳川光圀及齊昭二公
同	同	同	同	同	同	同
小瀬村	野口村	北方郡平磯町の	津山村大	飯宮村藤	横曾根	借樂園内

明治六年の創建にして、今別格官幣社に列せらる。

意富臣の族裔所に居住せるに、より其祖先を祭れるなり、或は式内社と云ふも如何にや。

那珂郡の式内神社なり、社内に永正の棟札を存せり。

郡内の式内神社なり、當社は仁和二年授位ありしこと、國史に見えたり。

當社授位の事は、文德實錄、天安元年の條に見えたり、神體は石なり。

三齊年か衡

舊土彙の神なるが如し、蓋し古へは、皇命に從はざるものをサベギと云ふ、彼等の首長を祭れるものと見ゆ。

久慈郡延喜式の官社なり、今那珂郡に屬すれ共、古くは久慈の郡内なりしが如し。

八溝嶺神社	同 町付八溝山	〔同白河郡の式内神社なり、今八溝山に在りて日光権現と云へり。〕
泉神社	多賀郡坂上村水	〔久慈郡の式内神社なり、貞觀八年授位の事あり。〕
朝香神社	同 上手綱	〔當社は寺内但馬守の建立にて應永三年永以後の棟札あり。〕

平師親

誓てし神もむかしを忘れずば
いのる心のするをたがふな

◎同寺院一覽

寺院名	宗派	建立年代	開基及	所在地	摘要
神宮寺	天台	南北朝か	不明	〔稻敷郡神宮寺〕	〔當寺には應安の板碑あり又延元三年建武五年等の文書に其名見かえられ或は此前に在りしもの蓋し當國の名刹なり。〕

寺院名	宗派	建立年代	開基及	所在地	摘要
逢善寺	同	天長三年	覺榮	同 太田村	〔天台の檀林にて末門百四十寺ありしと云ふ建立異説あるも古寺たること明かなり。〕
不動院	同	文明二年	幸密法印	同 江戸崎	〔土岐治英の建立にて慶長の頃は僧天海茲に住して中興の祖と呼ばる天台檀林の一名刹なり。〕
管天寺	曹洞	延徳二年	周道	同上の東北	〔矢張土岐氏の建立にして、周道を請す寺は丘上に在りて大湖を瞰下せるにより風光頗る宜し。〕
大念寺	淨土	慶長七年	慶岩上人	同上不動院	〔開山聖蓮社源慶岩上人の傳はの西南傳統系譜に見えたり。〕
藥王院	天台	徳一上人	徳一上人	〔眞壁郡紫尾村椎尾山〕	〔藥師堂の額には桓武天皇の勅願所に、最上人の開基とあれど如何にや。〕
傳正寺	曹洞	文永以前	法身禪師	同 菴穂麓	〔法身は松島瑞嚴寺の開祖、當地は其舊里なるを以て寺院を興せり。〕
樂法寺	眞言	大同年中	不明	同 雨引村	〔當寺は其後足利尊氏の再興せし由鐘銘に見えたり。〕

修學旅行案内

無量壽寺	根本寺	長勝寺	西蓮寺	平福寺	如來寺	法雲寺	般若寺
眞宗	臨濟	禪宗	天台	不明	眞宗	臨濟	不明
鎌倉時代	寺院年代推古時代	文治元年	延暦年中	不明	鎌倉時代	正慶元年	不明
順信	慧灌	源頼朝	最仙	不明	乘然	宗已	不明
同 息 栖	同 潮來町	同 潮來町	同 潮來町	同 潮來町	同 潮來町	同 潮來町	同 潮來町
廿四盟順拜第三の札所なり故に其名世に著はる。	寺觀壯麗にして且つ奇松あり、元徳二年の古蹟を傳ふ。	寺觀壯麗にして且つ奇松あり、元徳二年の古蹟を傳ふ。	寺觀壯麗にして且つ奇松あり、元徳二年の古蹟を傳ふ。	寺觀壯麗にして且つ奇松あり、元徳二年の古蹟を傳ふ。	寺觀壯麗にして且つ奇松あり、元徳二年の古蹟を傳ふ。	寺觀壯麗にして且つ奇松あり、元徳二年の古蹟を傳ふ。	寺觀壯麗にして且つ奇松あり、元徳二年の古蹟を傳ふ。

常陸國寺院一覽

西念寺	佛國寺	新善光寺	唯信寺	願入寺	長福寺	佛性寺	藥王院
眞宗	天台	淨土	同	同	眞言	天台	同
建保五年	寺傳年號天平七年	曆仁二年	鎌倉時代	同	足利初世か	同	大永年間
親鸞上人	寺傳 行基	親鸞上人	唯信房	如信の連枝	榮尊	不明	江戸通泰
茨城郡笠間町	同 鹽子	同 穴戸	同 太田町	同 祝町	同 鹽崎	同 栗崎	同 吉田
當寺は親鸞化導の禪房なるを以て東門跡の懸所として最も有名なるものなり。	俗に宮谷觀音と云ふ、寺觀壯麗境内廣潤風光殊に佳なり、慶長三年教導上人再興して勅願を賜ふ。	當國の守常陸介小田知重の墓は寺中にあり。	二十四盟順拜の札所中第二十六番目なりと云ふ。	如信は親鸞の子なり當寺も廿四盟の舊跡なるも女人の院主たる點は大に異れり。	江戸氏水戸城に住せし頃十八箇寺の一なり足利時代の曼陀羅木佛等を藏す。	當寺に於て珍らしき點は堂宇の柱に種々の銘ある事なり。	舊吉田神社の神宮寺にして規模甚だ高大を極む。

常陸國寺院一覽

正 <small>しやう</small> 宗 <small>しゆ</small> 寺 <small>じ</small>	耕 <small>かう</small> 山 <small>さん</small> 寺 <small>じ</small>	旗 <small>はた</small> 櫻 <small>うづ</small> 寺 <small>じ</small>	東 <small>とう</small> 蓮 <small>れん</small> 寺 <small>じ</small>	日 <small>にち</small> 輪 <small>りん</small> 寺 <small>じ</small>
臨濟	曹洞		眞宗	同
貞和年中	文永四年	康平五年	建保六年	鎌倉時代
月山和尚	詮 <small>せん</small> 慧 <small>けい</small>	源頼義	性 <small>しやう</small> 澄 <small>じやう</small>	不明
同 豊田村	同 瑞龍村	同上の山下	同 山田村	同 入瀧山
月山は夢窓國師に師事せし人なり。	初め陽雲寺と云ふ佐竹長義の建立なり。近時と雖も曹洞の名聲として其名高し。	初め東光寺と云ふ、康安中佐竹義篤之を再興し、正保中又水戸義公常寺を建つ。	廿四輩順拜の第八にて此宗の念佛道場なり但し初建の地は今と異れり。	前者と同じけれ共今衰頽して見るに足らず。

釋教の心を

雲はるゝ心の月はすみ染の衣の玉のひかりなりけり

修學旅行案内

善 <small>ぜん</small> 重 <small>じゆう</small> 寺 <small>じ</small>	祇 <small>ぎ</small> 園 <small>えん</small> 寺 <small>じ</small>	眞 <small>ま</small> 佛 <small>ぶつ</small> 寺 <small>じ</small>	淨 <small>じやう</small> 光 <small>かう</small> 寺 <small>じ</small>	照 <small>しやう</small> 願 <small>がん</small> 寺 <small>じ</small>	常 <small>じやう</small> 福 <small>ふく</small> 寺 <small>じ</small>	佐 <small>さ</small> 竹 <small>ちく</small> 寺 <small>じ</small>	法 <small>ほふ</small> 然 <small>ぜん</small> 寺 <small>じ</small>
淨土	曹洞	眞宗	眞宗	同	淨土		同
鎌倉時代	正徳二年	仁治年間か	貞應年代か	鎌倉時代	延文年間	花山法皇の時	南北朝時代か
善念房	心越禪師	眞佛房	唯佛房	念信房	了實上人	元密	永慶
同 酒門村	同 水戸市	同 飯宮村	同 湊町の西北方	同 那阿郡鷲子	同 瓜連村	同 久慈郡佐竹村天神林	同 太田町
廿四輩順拜所中の十二番なり	關帝廟を置き、明徳の風を取れること最も珍らし。	廿四輩順拜所の一にて今眞宗西派に屬す眞佛は親鸞の弟子なり。	寺は小丘の上に在りて眺望頗る佳なりと云へり。廿四輩順拜所の廿一番に當れり。	當寺も廿四輩順拜所の一にて其第十七番に當れり。	關東十八檀林の一にて末寺は六十有餘ありしと云ふ。	觀音あり坂東三十三の札所として其名高し、但し舊地は二度程變轉せり。	東國淨土宗中の古道場なり、關基蓮勝永慶上人の事は新往生傳に在り。

黃順之

巖花得雨新如染。古樹懸崖恠欲飛。日暮溪深人不渡。一雙白鳥傍林歸。

(八) 下野國

下野國は東西北の三面山嶽を以て包まれ、僅かに南西の一方關東平野に連なり、今地勢に因て之を別ては西北日光方面の山地は之を一區となす可く、又東北那須の高原は前者と別つ可き必要あり、次の關東平野に接する南部鬼怒川以下思川、小貝川の流域は復更に一區劃となすこと適當ならん、され共地質學上より之を曰んか、山地は主として火山系の類に限られ、鹽原地方には第三紀層有り、那須平原を初めとして南部の曠野は主として第四紀層より成れるにより、右を大別して三つとなすことを得るが如し、今地勢上の記述を略して單に後者の



日光神橋



足利切通し



足利鍔阿寺

記事を左に擧ぐ可し。

下野國の平野は宇都宮及び那須の兩平原にして、其の廣袤は國中の三分の一に過ぎず、足尾、日光の諸山其の西を限り、那須、高原の諸嶺その西北を擁し、東北は八溝山脈の蜿蜒として那須の平原に臨めるを認め、兩平原共に第四紀古層の累積にして、河川の近傍に少許の第四紀新層の堆積するを見るのみ、第三紀の末期まではこの地方より東京平原、水戸地方に至るまで、皆一面の海水にして、かの筑波山、佛頂山脈の如きは全く海中の一孤島たるに止まりしなり、其の後漸次海底隆起し、那須平原のごときは遂に一大砂礫層を構成し、遂に第四紀の前紀を経て以て今日の状態を呈するに至れり。(大日本地誌)

下野鹽原には中新統及び最新統發達す、中新統は粗粒の流紋岩質凝灰岩にして、時に泥土或は砂礫を交ゆ、層向は概ね北東—南西にして、小断層、小裂隙甚だ多く、傾斜は一定せず、金原理學士に従へば最下部にプレクシア質層灰岩あり、其の上に斑緑白色凝灰岩あり、其の上に板状凝灰質砂岩、細粒質白色凝灰岩、斑緑白色凝灰岩、凝灰質泥板岩、黝色凝灰質砂岩、綠色凝灰質砂岩、青灰色凝灰岩ありて種々の介殼化石を産す。(同上)

以上は第三紀第四紀層に關する畧説にして他は火山系の分のみに過ぎず、故に本篇には更に再説せず。

夏

夜

小山田恬齋

山雨初過夜頓涼。

悠然袖手立西廊。月輪雲脚相馳去。

人自清閑天自忙。

名	稱	高さ	位置
大平山	羽黒山	三百四十米突	栃木町の西南約一里餘にして、宮田大寺の北方の峰なり。
		四百五十四米突	河内郡今里の北西に聳ゆる一峰にして、鬼怒川に臨み

◎國內高山一覽

瀑

布

野有隣

六月寒生峭壁前。飛流千尺落爲淵。蒼崖黑處腥風起。應有神龍窟裏眠。

あつま路の草葉をわけん人よりも

おくる、袖ぞ先は露けき

女藏人參河

赤あか 薙たぎ 山
 男おとこ 體たい 山
 白しろ 根ね 山
(一名日光白根)
 鷄けい 頂ちやう 山
 帝てい 釋しやく 山
 山 帝 釋 山
 那 須 嶽 山
 馬 坂 山
 駒 神 山

二千二百九十米 日光連山中の一にて、其最東端に位する峻峰なり。
 二千五百米突 日光連峰中の主嶺にして中禪寺湖の東北に峙てり。一名二荒山と云ふ。
 二千五百米突 湯平より長に當る高山にして上部二峰となれり、其低き方を前白根と云ひ、高き方を奥白根と呼べり。
 一千八百米突 高原連山の主峯にして根古明神山の南方に位す。
 二千七十三米突 鹽谷郡の北方に位する高山にして山脈東西に綿互す。
 九百三十米突 下野より岩代へ越ゆる山嶽中の一にて所謂高原越の通路なり。
 一千九百十二米 那須郡中の活火山にして高原の北方に位し、其主峯を茶臼嶽と呼べり。
 二千五十四米突 鹽谷郡の西北に位する高山にして田代山の背後帝釋山の西なり。
 一千九百七十五米突 帝釋山系の一なり。

鹽 原 山
 三 依 山
 比 根 明 神 山
 赤 安 山
 鬼 怒 沼 山
 二 子 山
 庚 申 山
 大 眞 名 子 山
 小 眞 名 子 山
 太 郎 山

一千三百三十八米突 鹽谷郡の北東に位し釋迦嶽の西方に在り。
 一千四百五十八米突 鹽谷郡の北方に聳ゆる峻嶺にして三王峠に掛る金津街道の東に在り。
 一千七百八米突 高原火山系の一にて鹽原山の東南方に位せり。
 二千四百四十四米突 鹽谷郡の西北端に位し、上野、岩代及び當國の交界線に峙てり。
 二千四百四十三米突 鹽谷郡の西北方に位し、斜めに田代山と相對す。
 一千九百九十米突 足尾町の西方に位する高山にして上野との國境をなす。
 一千八百九十六米突 上都賀郡足尾銅山の西北に位する巖巒にして岩洞の奇異なる爲め古來其名高し。
 二千三百八十五米突 男體山の北方に位する熄火山にして西方は絶壁をなせり。
 二千三百四十米突 大眞名山の北方に隣れる熄火山にして岩石右と同じけれ共今火口なし。
 二千四百米突 大眞名子山の北西に當る熄火山にて岩石は橄欖石、霞輝石、富士岩等なり。

南	三	西	釋	架	温	月	女
月	本	岳	迦	梁	泉	山	山
山	鎗	山	ヶ	丸	嶽	山	山

二千三百八十四 赤羅山の西方に位し、危峯參差として偉觀を呈す、二峯共凡て富士岩より成れり。

一千四百四十三 赤羅、女觀兩山の東北東に位する高峯にして複輝富士岩より成れり。

二千二百三十二 白根山の北方に位する熄火山にして流紋岩より成れり。

二千乃至一千七 白根山の南方に位する高山にして複輝岩、富士岩より成れり。但し大嶽、劍ヶ峯、藥師ヶ岳以下の總名なり。

一千七百九十三 鹽原火山中の一にして鷓頂山の東方に位せり。

一千七百九十三 高原連山中の最高峯にして陸地測量部の標目を置けり。

一千九百四十米 那須嶽の北方に位する連山中の一にて最も高きものなり。

一千六百七十六 同 茶白山の西南に位する熄火山にして黒谷山、白笹山等三山中の一なり。

山行遇霧

安孫子貽堂

山行十里路高低

山家春興

曉霧蒼茫咫尺迷。惟有泉聲能導我。殷勤相送出前溪。

桃花流水洞中天。不記烟霞多少年。滿目風光塵世外。等閑逢著是神仙。

光明帝

山行

身世勞々厭倦塵。閑拈健竹作山行。雖然未結山林願。山色於人即有

李頤齋

山中紅葉

曉霜染葉景佳哉。一林斜陽蜀錦開。不識秋光幾千樹。吟隨流水上崔嵬。

藤原教秀

同 河川及湖水一覽

川及湖水名	流域及位置	摘要
永野川	長さ十四里	源を都賀郡の鍋山及び出流川の山中に發し、東南に流る。こと十里太平山麓より平流となり、屈曲して思川に入る。
思川	水二流あり、一を柏尾川と云ひ、二を大蘆川と云ふ、其川に入る。源は足尾の山中なり。	他南原川以下の三小流を合して曲折迂餘古河を経て渡良瀬川に入る。
姿川	長さ十里	源を河内郡の多氣山に發し、南流屈折して思川に入る。
鬼怒川	同約四十五里	源を高原連山の奥なる鬼怒沼に發し東流して五十里川と合し、更に南東に下りて大谷川と會ひ曲折して中利根川に入る。
中禪寺湖	東西二里南北最廣三十町	湖面は海拔約一千三百十米突の高き有りと云ふ、即ち男體山の南麓に在りて侵蝕作用の結果此凹地を生ぜしなり。
五行川	長さ約七里	鬼怒川を分派したるものにて芳賀郡の平野を貫流する海渠なり。
小貝川	源を那須郡の鴻の山に發し、曲折して常陸眞壁郡へ入る。	

等々黒川	同十二里	源を鹽原の山中に發し、椿根山の北より、東を巡りて那須野の西南限をなす。
蛇尾川	同十里	源を那須嶽の東方に發し、夕待以東は溪間を脱し三蔵川、奈賀川、余笹川等を合して那珂川に入る。
荒川	同十二里	源を那須郡鹽原山の大佐飛、小佐飛の山中に發し東南に下りて那須野を貫き大田原驛を過ぎて那珂川に入る。
秋山川	同	源流二派ありて鶴頂山、椿根山より發し、東南に下りて那珂川に合す。
幡川	同十里	源を安蘇郡秋山の奥に發し、東南して仙波邊より南に下り曲折して渡良瀬川に入る。
渡良瀬川	同廿四里	源を安蘇山中に發し、田沼驛より平地を貫流して渡良瀬川に入る。

過三絹川

浮樹炊烟遠欲無。平沙人散鳥相呼。千峰落日疑金碧。小李將軍着色圖。

安積良齋

内案行旅學修

名稱	所在地	人口	位置	摘要
足利町	足利郡	二萬五千	郡の中央に在り	古來東山道の名驛にして水陸の便あり。土地織物を産し市街殷盛を極む。
田沼町	安蘇郡	一萬二千	郡の東南に在り	郡内屈指の名邑にして市街は彦間川、野上川の相會して旗川に合する東端に在り。
佐野町	同	九千	郡の東南端に在り	舊堀田氏の城市にして多く織物を産す。

◎同市及名邑一覽

江上船
 一道長江通千里。漫々流水漾行船。風帆遠沒虛無裏。疑是仙槎欲上天。
 竹青沙白鳥飛廻。微雨淡煙斜日開。渡口有時聞笑語。垂楊堤外小舟來。
 下川東里

下野國及名邑一覽

名稱	所在地	人口	位置	摘要
藤岡町	都賀郡	四千	郡の南端渡良瀬川岸上に在り	此地汽車の便を缺けども渡良瀬川の舟行あるを以て商業盛んなり。
小山町	同	七千	郡の東南に在り	奥羽街道の都會にして古來有名の平地にあり。宿驛なり。珠に汽車の交叉點なるを以て百貨輻輳せり。
栃木町	同	二萬五千	郡の中央に在り	舊縣廳の所在地にして町は東西五町、南北九町、市坊八ありて多く商生絲等を出し商賈甚だ富裕なり。
壬生町	同	八千	郡の北東に在り	舊名を上原と云ふ、今の名は正中小山の日光間の要衝なり。京都の壬生官務の庶子彦五郎胤業居はせし爲めに呼びなせしなり。市街は小なれ共郡中の都會なり。市街舊例使街道の一驛にして其繁華宇都宮に次げり。現今は多く麻を産せり。
鹿沼町	同	一萬三千	郡の東北方に在り	舊例使街道の一驛にして其繁華宇都宮に次げり。現今は多く麻を産せり。
石橋町	下都賀郡	二千餘	郡の東端に在り	奥羽鐵道中の一驛にして雀の宮と小金井との中間に在り。市街小なれ共商家繁榮の觀あり。
上三川町	河内郡	五千	郡の南方に在り	栃木、眞岡間の街道に當る一驛にして宇都宮に近く、古くは横田、今泉二氏の居住せし城迹あり。

修學旅行案内

宇都宮市	河内郡	四萬	宇都宮市	河内郡	四萬
今市町	上都賀郡	六千	今市町	上都賀郡	六千
日光町	同	同	日光町	同	同
久下田町	芳賀郡	五千	久下田町	芳賀郡	五千
眞岡町	同	七千	眞岡町	同	七千
益子町	同	六千	益子町	同	六千

國の中央に在りて奥羽街道の要衝なり。市坊六十一、町の長さ東西一里十二町、南北一里廿三町あり。縣廳の所在地なるが、奥羽、日光等の街道と内第一の都會地となれり。日光街道の一驛にして、古くは股盛を致せし由なるも、現今汽車開通の爲め衰微せり。市街は鉢石及び西町の二にして、共に日光山麓に在り而して停車場は鉢石町の内、小字松原町に存す。當所は素より山間の一宿に過ぎざれ、現今は避暑の客多きと日光廟の遊覽者の絶えざる爲め相應に繁榮せり。

郡の東北方に在り。郡の南端に位して五行川の西に在り。下妻、眞岡間街道の宿驛にして郡内の名邑たり。

郡の西南に位して五行川の岸に在り。市坊十二あり、古來眞岡木綿の産地として其名高く、且つ商賈殷盛にして一郡の都會地たり。

郡の中央より稍や南方に在り。山間の大邑にして人家多し、當地は舊宇都宮紀清兩藩中紀氏の惣領たる益子氏の城邑なりき。

下野國及市名一覽

茂木町	同	六千	茂木町	同	六千
氏家町	鹽谷郡	六千五百	氏家町	鹽谷郡	六千五百
喜連川町	同	七千五百	喜連川町	同	七千五百
矢板町	同	六千	矢板町	同	六千
大田原町	那須郡	六千	大田原町	那須郡	六千
川西町	同	三千五百	川西町	同	三千五百
黒羽町	同	五千五百	黒羽町	同	五千五百

郡の東方に位して、逆川の西方に在り。郡内山間の一名邑にして、最も煙草の産地なり。

郡の西端に位して、鬼怒川の東岸に在り。郡内屈指の名邑にして、奥羽鐵道線の一驛となれり。古くは氏家内膳の居所なるを以て、今其城址あり。

郡の西方に位して、荒川の會流地に在り。舊孤川と云へる地にして、奥羽街道の要衝に當れり。市街櫛比商業殷盛を極む。

郡の東方に在り。奥羽街道の一驛にして、郡内の名邑なり。今郡役所以下皆な茲に在り。

那須野の東隅に位して、蛇尾川の右邊に在り。那須七騎の一家大田原氏の舊邑にして、通稱繁商業殷盛郡内第一の都會なり。

郡の東方に在り。郡中の一都會にして、舊大關氏の城址を存せり。地は山間に僻すれ共、市街黒羽町と相對し、見るべし。

同上、那珂川の東岸に在り。舊大關氏の城邑なりしこと前者と同

馬頭町	那須郡	五千	郡の南東に位し、舊武茂庄の大地にして近く武茂城址あり、地は山間に僻すれ共市街少し、會流地に在り。繁榮せり。 郡の南端に位し、舊森田氏の城邑にして物産には綿紗、縹、綿織子等あり、市街大ならざれに在り。共頗る繁盛の地なり。
烏山町	同	四千五百	

暮春郊行

劉維翰

楊柳如烟草色迷。大堤春雨綠萋々。郊村處處尋花至。唯有黃鸝各自啼。

夏詩

釋萬龜

南風吹送大江濱。萬丈奇峰都是雲。唯有殘鶯啼綠樹。北窓呼夢々紛々。

初夏曉行

橫田裕

水田漠々綠生波。濕透蓑衣奈冷何。出盡村莊天未曙。秋鷄啼處雨聲多。

◎同神社一覽

神社名	祭神	所在地	摘	要
樺崎八幡宮		足利郡北郷村	足利上總介義兼の建立にて同人死後其廟墓たり御影堂たるを以て一時輪奐の美を極めしが今總かに小祠を存するのみ。	
唐澤山神社	藤原秀郷	安蘇郡唐澤山	明治十八年の建立にして別格官幣社なり。當地は秀郷居城の地と云ふを以て神社を設	
村檜神社		下都賀郡小野寺村	當郡内式内神社の一と云へど確否不明なり。	
大前神社		同 赤麻村大崎	村内村はづれの林中に在り式内神社の一なりんかと云ふ。	
胸形神社		同 寒川村	式内社ならんかと云へども猶胸形社は他所にも存せり、今寒川村の堤上に在り。	
野木神社	菟道稚郎子	同 野木村の西	式外の社なれども俗に寒川郡の大領惣社と云ひて其名高し。	

修學旅行案内

阿房神社	室六所神社	鹿沼今宮神社	菊澤神社	雀神	二荒山神社	東照宮
太玉命	木花開耶姬		藤原藤房	藤原實方		徳川家康
同 岡々田村粟	同 國府村惣社	上都賀郡鹿沼町	同 菊澤村	河内郡雀宮村	同 宇都宮	上都賀郡日光
當社は神武天皇の時阿波齊部が東國結城を開く其の祖神を祭りしものならんと云ふ。	當國の惣社にして式外神社なり、祭神は諸國と同様六神を合祀す社殿壯麗にして境内清淨なり。	日光の三社権現を勧請せしものにて地方の名祠なり、社殿壯麗ならざるも亦見るに足れり。	明治維新の初め此社を立て今日知名のものとなれども藤原卿の事蹟に至りては信すべからず。	創建の年次及び祭神共審かならざれ共近年當社の舊社務所跡と覺しき所より奈良朝時代の古瓦を多く出せし點より考ふれば由來頗る古きに似たり。	當國の一の宮にして今國幣中社なり、祠宇壯麗にして境内廣潤頗る眺望に富めり。	元和三年の創建にして其盛觀無前の祠宇を建立せしは徳川光圀の寛永十一年なり、當山には諸社存すれ共多くは説明を畧せり。

下野國神社一覽

星宮	二荒山神社	大前神社	氏家神社	木幡神社	温泉神社	健武山神社	三輪神社
星辰なり		大己貴命					
同上、神橋の邊	同上、東照宮の	芳賀郡眞岡町	鹽谷郡氏家町	同 矢板村	那須郡那須村	同 馬頭町大字	同 那珂村大字
東西兩町の總鎮守にして閉山勝道上人の建立なりと云ふ。	勝道上人の當山を開くに當り二荒山神以下を奉祠せるものにて明治以後國幣中社に列せらる。	當郡式内神社の一にて古くは三十三郷の總鎮守なりき。	當社は氏家公頼が築城の頃宇都宮二荒の神を移して祭れるものなり。	郡内第一の大社なるも由來不明也、或は云ふ延暦中坂上田村麿與羽征討の際山城木幡の神を勧請せしなりと、去れ共今確證なし。	當社は湯前明神と云ひ貞觀五年授位の事あり、後延喜式の神社に列せられたる有名のものなり。	那須郡中式内社の一にて承和二年授位の事、國史に見えたり、猶此地は黄金の出し爲め廣く其名を知らる。	式内神社の一にて承和五年官社に列せられ元慶以後授位の事國史に見えたり。

高橋神社

磐鹿六雁命

下都賀郡相村大字高橋

六雁は大彦命の孫にて景行天皇に從ひ東國に來て領主となる子孫房基三州に蕃延せしを以て彼等祖先を祭りしものと見ゆ。

祿子内親王

神がきにかゝれるならば葬あさかほの

ゆふかくるまで句いはざらめや

◎同寺院一覽

寺院名	宗派	建立年代	開基及 建立者	所在地	摘要
鷄足寺	眞言	中興 建保三年	中興 良賢上人	足利郡小俣村	創始不明なるも中興の後は東園著名の靈場たりしが近世に甚た衰へたり。 眞言宗の檀林として古來有名の大寺なりしが今大に衰微せり。

寺院名	宗派	建立年代	開基及 建立者	所在地	摘要
鏡阿寺	同	正治元年	鏡河上人	同 足利町	而かも猶堂字の見る可きもの多し。堂・講堂・四方の四脚門は建久七年の建立なり。
長林寺	時宗	文安五年	大見和尙	同上西の宮	當寺は城主長尾但馬守景人の建立にて代々の菩提所となれり。故に歴代の石塔及び齋像等あり。
住林寺	時宗	鎌倉時代	一邇上人	下都賀郡小野寺村	本願は小野寺左衛門尉泰綱なり。
大中寺	曹洞	延徳年中	妙慶禪師	同 富田村 字 山田の東	同宗中關東總祿三箇寺の一にして小山判官重長の本願に出づと云ふ。寺城廣潤堂宇壯麗にして且つ寶物多し。
天翁院	同	明應年中	正悦和尙	同 小山驛 の北	本願は小山判官成長にて開祖塔。芝正悦は山中寺の二世なり。又一説に天翁は小山高朝なりと云ふ。
傑岑寺	同	天正以前	天嶺和尙	同 皆川村	本願は皆川山城守廣照にて其父俊宗の爲に建立せるものなり。

下野國寺院一覽

宗光寺	專修寺	西明寺	地藏院	圓通寺	妙雲寺	雲岩寺
天台	眞宗	眞言	同	淨土	臨濟	同
弘安九年	嘉祿元年	鎌倉時代か		應永年中	正和年中	弘安六年
盛海修正	親鸞上人	不明	宇都宮朝綱	眞榮	大同妙吉和	佛國禪師

芳賀郡太田村の南方 源頼朝の本願にて長沼淡路守宗再興す。後天海正僧之を

同 高田村 關東に於ける浄土眞宗の總本基に於て古來其名高く、現今も寺郭の如く當國屈指の一大名刹なり。

同 益子村 坂東巡禮第廿二番の札所にして俗に北條時頼の建立と云ふ。

同 大羽村 宇都宮家の菩提所なるを以て代々の墓石あり其内に文明二年の文字見ゆるものあり。

同 七井村 同派名越一流の檀林なり。

同 那須郡下鹽原 俗に小松内府重盛の焼母妙雲尼の遺跡と云へど審かならず。

同 須佐木村 當寺は大治年中初更和尙開基の由寺傳に見ゆれ共確證なし茲に佛國禪師の傳にも異説あれど宏壯古雅愛すべしと云ふ。

修學旅行案内

巨谷寺	龍興寺	安國寺	興禪寺	清嚴寺	妙正寺	觀專寺	一向寺	輪王寺
不明	眞言	同	臨濟	淨土	法華	眞宗	眞宗	眞宗
不明	不明	足利初世	弘治年間	文永二年	鎌倉時代	鎌倉時代	鎌倉時代	王朝の初
中興傳海僧正	不明	不明	眞空妙應禪師	芳賀伊賀守清原高繼	日蓮上人	義空信願上人	禮知何上人	勝道上人

上都賀郡荒針 觀音堂にて坂東順禮第十九番の札所なり觀音は五六丈あり巖石へ彫り付く岩洞の奇遠近に聞ゆ。

河内郡藥師寺 此二寺共に藥師寺迹にありて古戒壇の位置を争ふ、而も今明かならざるべけれ共龍興寺は尊氏の建立なるべし。

同 宇都宮北河原町 本願は下野守眞綱なり一時廢して後再興せり。

同 上河原 本願は長宮左衛門高知にて本尊釋迦如來には應安二年の銘あり。

同 西原町 廿四報巡拜第十三番の靈場にて上人は佐竹隆義の二男なり。

同 大黒町 本願は宇都宮景綱入道蓮瑠なり、猶境内に長樂寺あり。

上都賀郡日光 中興の祖は天海僧正にて慶長十八年當山に住す、舊時の壯觀は今日見る可からざるも輪奐の笑は當國屈指のものなるが如し。

慈願寺

眞言

鎌倉時代

信賴房

同 烏山町

當寺は廿四盟願拜所の第十三にして初め郡内栗野郷に在りしが三轉して當所に移れり。

冬日遊野寺

葛子琴

寒郊古刹樹蒼々。幽徑無人午有霜。一局手談何處熟。山茶花下小禪房。

山寺

安井武

桂樹花開山寺秋。白雲流水共悠悠。登臨月照三千界。下見江波迷色愁。

(九) 上野國

上野は關東平野の西北隅を占むる一國にして、東西北の三面は山嶽を以て包まれ、僅に南方の一面のみ曠原をなせり、現今は國內を十一郡に別ち、更に高崎、前橋の二市を置き、縣治を群馬と云へり、又之を地勢上より論ずれば平地一帯

は自から一區となす可く、山地は利根の水源を界として、其東方を一區となし、又吾妻川の源流を以て其北部を別つ可く、次は碓氷川を以て其北方を一區とし、南部は概括して又之を一區となすこと適當なるが如し、然れ共地質學上より觀察せんか、當國は前記下野國と同様東西北の山地は主として火山系に屬し、平地は即ち第三紀、第四紀に屬せり、故に研究上二區に別つを可とすれ共本篇は其詳細を擧ぐるに能はざるにより、例に因て諸表のみを掲載すること左の如し。

留別

松岡廷美

東溟千里久離群。僻地風光獨有君。寵送何情分手後。遙天共望暮江雲。

途中吟

木愷

路轉山間暮色來。白雲相伴意悠哉。天寒野曠孤村遠。好是放歌步月回。

太皇太后宮

旅人の露はらふべき唐衣

またきも袖のぬれにけるかな

◎國內高山一覽

山名	高さ	摘	要
三國山	一千九百六十八米突	信武、毛三國に跨る山嶽にして勢多郡に屬し、神名川の上流地となる。此山は上野國澁川より六日町に通ずる道なるを以て一に三國峠とも云へり。	
御荷鉾山	一千三百米突	地質學者の所謂御荷鉾系の語は即ち當山より出づ、今勢多郡に屬して上峯二つに分れ其不動ヶ嶽には石の不動を祭れり。	

白髮岩山	一千五百十二米突	甘樂郡に屬して御荷鉾山の西々北に位す、其西は大仁田山に連り、南麓は神名上に臨めり。
荒船山	一千四百四十米突	毛、信兩國の界をなせる高山にして、今北甘樂郡に屬し、余路峠の北に當れり。
妙義山	一千六百六十五米突	碓氷、甘樂の郡界をなせる奇山にして山峰群立、岩石削るが如く、其高峯は白雲、金洞、金鷄の三つに別れ殆んど神巧鬼斧に成れるが如き觀を呈す。
鼻曲山	二千六百餘米突	碓氷峠の西北方に位する高山にして信州佐久郡及び國內群馬郡の西北に屹立する高山にして、上に大沼あり、此山温泉を以て名高しと雖も山容の美は又火山の好資料たるべし。
榛名山	一千四百五十七米突	群馬郡の西北に屹立する高山にして、上に大沼あり、此山温泉を以て名高しと雖も山容の美は又火山の好資料たるべし。
淺間山	二千五百米突	毛信兩國の國界をなす高山なるも古來此山信州に附屬する例なるを以て畧説を附せず。
吾妻山	二千三百六十米突	吾妻郡の西方信州上高井との國界をなせる高山にして俗に富士様、又袴の腰、瓶尻、鹽尻等の名あり。
白根山	二千四百四十二米突	同郡の西北に當る高山にして日光の白根山と別つ爲め或て其内の湯釜孔は直徑約三百米突あり。
稻刈山	一千六百廿五米突	同郡の最北に位し、上、信、越三國の界をなす高山なり。

利根川	長き二十八里	利根川は上野、中、下の三流に別つ、上野を流るゝものは即ち上流にして其源を利根郡藤原の奥なる文珠山に發し、片科、吾妻、烏志月等の諸川を合して國の中央を流る。源を南甘樂の山谷に發し、東北に流れて御荷鉢山下なる柏木に至り、更に東北に流れて烏川と合して利根に入る。
神名川	同 十餘里	

寒雲斷續月如弓。蕭寂孤村未睡中。近有後山狼乳子。一聲震地五更風。
 綠樹陰々野徑迷。山中自愛一幽栖。月清夜靜無人問。夢後時聞杜宇啼。
 松影深處鎖巖扉。秋色蕭條人跡稀。搖落西風山寺夕。翠嵐吹上菱荷衣。
 ◎同 河川一覽

保高	三國	清水	朝日	笠嶽	赤城	新田
山	山	峠	嶽	嶽	山	山
二千〇廿米突	一千三百六十八米突	一千四百八十米突	二千九百八十米突	二千二百米突	一千八百九十三米突	約二百三十五米突
一に武蔵山に作る利根郡の中央北方に位する高山にして、其南方の尾を花咲峠と云へり。	上野、信越三國の交界をなす高山にして古來交通の峠道あり、但し同名の山二所に在ること武蔵と同じ。	利根郡の北端にして、保高山の北西に當れり、此道少しく峻なれ共三國峠に比すれば捷徑なるを以て人之を便とす。	清水峠の東方に位する高嶽にして當國北方の嶺なり。	那の北東に位する峻山にして藤原入の最高峯なり、此山一に笠科嶽とも稱す。	勢多郡の北嶺にして妙義、榛名の二峯と合して上野の三名山と稱せらる、山頂は數峯に別れ其中央に大磐ありて水を湛ふることを榛名に同じ。	新田郡内の名山にして渡瀬川の西方に在り、敢て高山と云ふにはあらず、古來多時歌に出で且つ歴史上に有名なるを以て茲に擧ぐ、但し地質學上にては古生層に屬する火成岩の迸出せしものなりと云ふ。

宿上毛山中

市河寛齋

片赤吾鳥後碓南蕪三	品谷妻閑氷目	川川川川川川	同同同同同同	長二里							
源を多野郡の御荷鉢山に發し、曲折して神名川に入る、固より溪湖の一小流に過ぎされ共地學上有名なるを以て茲に擧ぐ。	源を甘樂郡依路峠に發し、東流七里にして下仁田驛に至り、更に西牧川を合せて烏川に入る。	源を碓氷の山中に發し、東流して安中驛に至り、更に後閑川を合せて烏川に入る。	源を碓氷の諸山に發し、秋間川を入れて碓氷川に注ぐ。	源を同郡鼻曲山に發し、東南流して榛名川を容れ、更に碓氷川、鏡川、神名川等を合せて利根川に入る。	源を吾妻郡の烏居峠に發して東流し、長野原に至りて入山川を入れ、又大戸川、山田川、名久田川を入れて利根川に注ぐ。	源を利根郡三國山に發し、東南流して布庵に至り、須川を會して利根川に入る。	源を同郡尾瀬峠及び鬼怒沼山に發し曲折して輪組、岩室、沼須等を経て利根川に入る。	源を同郡利根郡三國山に發し、東南流して布庵に至り、須川を會して利根川に入る。	源を同郡尾瀬峠及び鬼怒沼山に發し曲折して輪組、岩室、沼須等を経て利根川に入る。	源を同郡利根郡三國山に發し、東南流して布庵に至り、須川を會して利根川に入る。	源を同郡尾瀬峠及び鬼怒沼山に發し曲折して輪組、岩室、沼須等を経て利根川に入る。

矢早桐渡粕	場生良瀬	川川川川	同同同同	八里
源を勢多郡赤城山に發し、南流して佐波郡内に入り、武士の間にて下廣瀬川に入る。	源を山田郡梅田村の東北方なる太郎別當山に發し、桐生町の東を経て下野の足利郡に入り渡瀬川に注ぐ。	源を同郡大間々の山間に發し、南流して笠懸野を貫流し、徳川、大館を過ぎて利根川に注ぐ。	源を同郡只上 <small>ただかみ</small> に發し、東南流して多々良沼に至り屈曲して下野足利郡の高橋にて渡瀬川に入る。	此河の略説は下野の條に出せり、參照すべし。

江頭雜詩

寺門靜軒

寒江風渡自凄々。蘆葦萎霜洲渚低。

刀禰河上口號

樓頭夢覺水禽啼。

東寧河上西風急。

梁川星巖

征馬長嘶日欲頽。地近三毛山漸出。天當八月雁初來。

修學旅行案内

◎同市及名邑一覽

名稱	所在地	人口	位置	摘要
鬼石町	多野郡	三千五百	郡の南端にして三波川の東に在り。	郡中の一名邑にして西方三波川に奇勝あり又近傍福持寺境内には文永以下の古碑あり。
藤岡町	同	七千五百	郡の東端に在り。神流川の近くに在り。	信州街道の要路にして生絲及び瓦の産地として有名なり。當郡の郡役所は又茲に置かる。

英雄骨朽餘軍壘。雀鼠聲稀長草萊。饑困猶勝兵燹后。幸逢昭世莫興哀。

秋夜宿淮口

露白草猶青。淮舟倚岸停。風帆幾處客。天地兩河星。樹靜禽眠草。沙寒鹿過汀。明朝誰結伴。直去泛滄溟。

景池

上野國及名邑一覽

名稱	所在地	人口	位置	摘要
新井町	同	三千	郡の東端に在り。	舊笛木町と云ふ中山道の一驛にして製絲業盛んなり。
吉井町	同	六千	郡の東北邊に在り。	郡内の名邑にして市街繁榮せり。
富岡町	北甘樂郡	九千	郡の東南位に在り。	信州街道の別路にして製絲場あり殊に鐵道の便あるを以て交通頻繁なり。
福島町	同	三千	同	下仁田鐵道に停車するを以て交通の便あり大井月へ架したる石橋には仁治三年の銘あり。
一ノ宮町	同	四千	郡の東方に在り。	當地は現今鐵道開通の爲め大に交通の便を得たるも別に特種の産物としてはなし。但し其前神社は參詣者多くして其名高し。
下仁田町	同	三千五百	郡の西方に在り。	郡の大邑にして信州佐久郡への驛路なり。現今は上毛鐵道の終極點として行客多く入込めり。
横川町	碓氷郡白井町		郡の西方に在り。	碓氷川に接す。現今五料と合せて白井町と總稱す。汽鐵車繼ぎ換への場處なるが風景の美なるを以て賞せらる。

上野國市名及一覽

沼田町	草津村	伊香保町	澁川町	金古町	惣社町	倉賀野町
利根郡	吾妻郡	同	同	同	同	同
六千五百	約五百	五千餘	二千八百	三千五百	四千	

郡の西南端に在り。烏川の北岸に在り。中山道中有名の驛宿にして市街南北に長く商家皆な相應の繁榮を致せり。市外古墳多きこと驚く可し。郡の東端に在り。利根川に近し。市街小ならずとも窳々として頗る衰微の類あり。郡の東方に在り。國府の北に在り。此地は高崎より吾妻、利根兩郡へ通ずる街道中の宿驛なり。郡の北東に在り。利根川の西岸に在り。郡内屈指の名邑にして、現今前橋より一族澁川氏の領地なりしを以て今日の名を存せり。郡の東北に在り。市街は筑波町の如く階段をなして山の半腹に在り。土地清淨にして眺望絶佳なり。住民は皆な浴客の爲めに業を營み頗る富裕なるが如し。郡の西方に在り。白根山の東麓に在り。當地は單に温泉の存する爲めに繁榮す。而も土地僻遠なるを以て近時衰微の兆あり。郡の西南端に在り。市坊十三、人家稠密、商業少しく繁榮せり。前橋より越後に通ずる要衝にして古來其名高し。

修學旅行案内

高崎市	里見村	板鼻町	磯邊村	安中町	松井田町
群馬郡	同	同	同	同	同
三萬八百九十餘		二千五百		七千二百八十餘	三千五百

郡の中央にして南方に位せり。古來の中山道驛にして古く松枝と云ひしこと太平記其他の書に見えたり。現今鐵道停車場有りて相應に繁榮せり。郡の東方に在り。碓氷川の北岸に在り。市街は東西廿五町、南北七町ありて最も狹長なり。中山道中高崎以西の繁盛なる驛にして、蠶業頗る隆んなり。郡の東南部に在り。寂寥たる一村落なれ共鐵泉の存する爲め浴客の來遊多くして其名世人に知らる。郡の東北端に在り。郡内の名邑にて古く其名を知らる。當所の舊里正木島氏の家は俗に千年の古屋敷と云ひて頗る古建築上の名高し。安房の里見家の故墟として其名最も高し。同。市坊四十三、町の廣袤東西十六町、南北三十五町國內一二の大都會なり。近時鐵道の便あり、且つ生絲の産業盛大にして商賈殷賑を極む。

覽一邑名及市國野上

尾島町	太田町	館林町
同	同	邑
七千	四千	一萬
郡の南端に在り。市街盛々たれ共養蠶の道開けて以來多少繁榮せり。	郡の東端に在り。郡中の名邑にして舊例幣使街道の一驛なり。近傍に大光院あるを以て参詣者多く爲めに繁榮を致せり。	郡の中央に在り。土地僻遠なる爲め多少衰微せるも織物の産地なるを以て相應に繁榮せり。

即事

野田室

東風次第物華新。楊柳陰々花影重。自喜山村春事好。匏樽日々伴吟筇。

山村原公淵

燒炭深林三兩處。淡烟和月透溪隈。半生不解山中事。只道輕雲出岫來。

◎同 神社一覽

内案行旅學修

前橋市	境町	伊勢崎町	大間々町	桐生町	蕨塚町	木崎町
勢多郡	佐波郡	同	山田郡	同	新田郡	同
三萬五千	三千餘	八千	五千五百	二萬三千九百餘	四千	三千
市坊四十六、町の廣袤東西一里十六町南北三十一町。國內第一の都會なり。當地は水陸の便あり、且つ縣廳、裁判所、師範學校以下皆な茲にあり、殊に蠶絲の賣買盛んなるを以て頗る股賑を極む。	郡の東端に在り。舊例幣使街道の一驛にして世良田に近し。市街細長にして小なれ共多少商業の盛を致すが如し。	郡の中央に在り。郡内の治所にして鐵道の便あり、土地は蠶業の盛んなる爲め商賈富裕を致す。	郡の西端に在り。蠶業盛んにして殊に布帛の特産地なり。故に市街最も股賑を致せり。	郡の中央に在り。下野街道の別路なり、土地は蠶業の盛んなること人口に餘矣し。上州絹の名は海内に聞ゆ。	郡の西方に在り。笠懸野の内なる一村なるも土地に礦泉出でて浴客多きが故に繁榮せり。	郡の南方に在り。舊例幣使街道の一驛にて多少市街の體をなせり。

上野國神社一覽

小祝神社	惣社	若伊香保神社	伊加保神社	白根神社	小高神社	赤城神社	火雷神社
					穗高見命	大己貴命	
同 片岡村石原	同 元總社村	同 古卷村有馬	同 伊香保	同 香妻郡草津温泉	利根郡後閑村	勢多郡赤城山三夜澤	佐波郡芝根村下之宮
式内神社の一にて元慶四年授位の事は國史に見えたり。	諸國の分と同じく國內諸神遙拜の祭壇なり。	當社は貞觀五年元慶三年等に授位の事國史に見えたり。古社たること明かなり。	式内神社の一にて承和二年名神に預る由國史に見えたり。	當郡十二坐の一にして從二位白根明神と云ふものは是れなり。	祭神は海神の子にして古く清和紀に授位のことあり、故に古社たることを知るに足れり。	承和以後時々授位の事あり、當郡の式内神社として有名のものなり、今は縣社なれ共境内甚だ廣く殿社十一棟を存して多く寶物を藏せり。	當社は延暦十五年に授位ありし事國史に見えたり、後式内神社の一に列せられたるものなれば創始頗る古し。

修學旅行樂内

貫前神社	宇藝神社	妙義神社	波己曾神社	碓氷神社	榛名神社
經津主命					
北甘樂郡一の宮	同 吉田村大字	同 妙義山の北	同 上諸月	碓氷郡碓氷の碓	群馬郡榛名山
當社は國內の一ノ宮にして今國幣中社に列せらる、古くは式内社なるが右授位の事は大同承和の時代に行はれしこと國史に見えたり。	郡内式内社の一にて本國帳に甘樂郡從一位大明神と云ふものは是れなり。	郷社にして祭神は不明なり、俗に武尊神と云へども信するに足らず、其他種々の説あり、其皆後人の附會なり。	土地にては土主神となせり、當社は貞觀元年授位のこと見えれば古社なること明かなり。	當社は熊野權現を勧請すと云ひ傳ふれ共不明なり、古鐘に正應五年の銘あるを以て古道崎町に在り。	式内神社にして今郷社となれり、境内廣潤ならずされ共奇巖峭立眺望頗る絶佳なり。

天地の開けしときの蘆牙や

法印定爲

大國神社	美和神社	賀茂神社	生品神社	新田神社	長良神社
新田義貞					
佐波郡采女村下	山田郡桐生新町の西北方	同 廣澤村松原	新田郡生品村市野井	同 太田町の北新田山	邑樂郡瀬戸井村
郡中式内神社の一にて社地高燥最も眺望に富めり祭神不明なるも佐位那の國造三三を合祀せるに似たり。	桓武紀延暦十五年の條に美和神社を官社となす由見え後に式内社の一に列せらる。	郡内式内神社の一にて猶古くは延暦に官社の列に加ふる事國史に見えたり。	當社は元弘二年新田義貞が神前に旗擧げせしこと太平記に見え又本國嶼には從三位生階明神とも載せられたる有名の神社なる可きも今衰微して廢屋の如し。	明治六年の創建にて新田義貞を祭れり。	本國嶼に正三位長柄明神と記する神社にして天正の昔武州埼玉郡に祭りしこともあれば其古社たること明かなり。

◎同 寺院一覽 神の七代の始めなりけむ

大信寺	不動寺	永源寺	淨法寺	寺院名
淨土	同	不明	天台	宗派
足利時代か	不明	足利時代か	奈良朝時代	建立年代
不明	川	自超和尚	道忠	建立基者及
群馬郡高崎市の東邊	碓氷郡松井田村	同 上淨法寺の西方	多野郡鬼石町大字淨法寺	所在地
足利直義每國に一寺を建て安國寺と云へる由古書に見えたり。當寺も其の一ならんかと云へ	郡内靈場中の一にて最初瀧州に在りしが川更の時此地に移せ	當寺は長尾景仲父子之れを建立す。始め御嶽に在り後此地に移せり。或は始建の時を文明十二年なりと云ふ。	當寺は聖武天皇の勅願にて其後最證再建すと云ふ。堂宇古雅にして七八百年を経たるが如しと云ふ。	摘要

上野國寺院一覽

惣持寺	善昌寺	泉龍寺	善養寺	妙安寺
眞言	天台	臨濟	不明	眞宗
應安以前	大同年間	天授元年	嘉應元年	鎌倉時代
度	宥	白崖禪師	不明	成然房
範	海	同 名和村	同 榎町	同 榎町
新田郡世良田村	山田郡大間川町の西新	同 名和村	佐波郡善養寺村	同 榎町
寺傳に新田義重八幡宮を勧請して岩松宮と云ひ傍に眞光寺を建てしが慶範此寺と館坊と清水寺とを合せて一寺となす而して寺と名を改む云々。	當寺には有名なる新田義貞以下義助善昌等の墓と稱するものあり人物の當否は別として古墓の資料には充分參考に供するに足れり。	大江某の本願にて白崖を日光より請じ之を開山とせり現今は永源寺派の一派にして白崖派の本山たり。	寺に元龜元年の官符を藏するの外特記すべき事なし。	廿四願願拜所の一にして天福元年初て下總に當寺を建て天福元年川越に移り慶長中今の地に正八移れり。

修學旅行案内

養行寺	橋林寺	龍海院	玉泉寺	雙林寺	妙見寺
法華	同	同	同	曹洞	不明
慶長六年	文明年中	天文元年	嘉吉年間	寶徳二年	不明
酒井重忠	玉岑和尚	横外和尚	一州和尚	正文	不明
同 芳町	同 橋口町	勢多郡前橋市内	利根郡古馬牧村後閑	同 白井村	同 引間村
初め三州經川に在りしが酒井家忠は即ち其大檀那なり。	當城主長尾景信の建立にて初め城内に在り後今の地に移す寶物多し。	三河國額田郡大明寺村是之字寺の末院にして後當所に移す世々酒井家の菩提寺として歴代の墓を存す。	沼田長忠の本願にて本尊は釋迦如来を安置す境内廣瀬にして北に峻峯あり南に溪流繞りて最も幽邃な極む。	本願は白井城主長尾景仲の建立にて當時は上毛信越佐渡等諸寺の本山として頗る盛大な致せり。	古くは息災寺と云ふ河内國石川郡妙見寺の所領地なり創建年月詳かならざるも古寺たること明かなり。

長樂寺	天台	鎌倉初世	榮朝	同 世良田	最初は禪宗にして後鳥羽天皇の勅願所なりしが後荒廢せしを慶長有数の名僧天海之を再興して東國
満徳寺	時宗	淨念比丘尼	同 世良田	淨念は徳川頼氏の女にて後徳川秀忠の長女千姫之を中興す而も今殆んど見るに足らず	
大光院	淨土	慶長十六年	吞龍	同 大田町	境内廣くして堂宇壯麗なり、土俗稱して之を吞龍様と云ふ、慶長十六年徳川家康其祖先新田重隆の舊跡を尋ねて此寺を立て増上寺の觀智國師の弟吞龍を以て開基とせるなり
茂林寺	曹洞	應永三十三	大林正通禪師	邑樂郡六郷村字堀江	寺域甚だ廣くして堂宇頗る多し、且つ什寶數多を藏せり、當寺は彼の文福茶釜を以て有名なる譯なるが其品今も猶存せりと云ふ

常建

清晨入古寺。初日照高林。竹徑通幽處。禪房花木深。山光悅鳥聲。潭影空人心。萬籟此俱寂。惟聞鐘磬音。

結尾 瑣言

關東八州、其土廣大にして諸學問の事物頗る豊富を極む、故に之を觀察し、研究す可きこと一にして足らず、去れ共本篇の始めに列舉せし事項の一端は畧ぼ之を悉せりと信ず、猶自己の豫定としては叙説したき分盡きざれども今回は姑く缺如せり、唯だ讀者諸子に向て是非共知らしめ度は即ち土俗上の觀察點なり、此事に就ては嘗て東京人類學會員阿部正功、鳥居龍藏、大野雲外の三氏が武藏國秩父郡浦山の土俗を調査せられたるものあるにより、右を引用して着眼の如何を紹介せんと欲す、看者之を以て他を類推せられよ。

○秩父地方に於ける人類學的旅行

浦山村の土俗(全文中の一節なり)

肥後の五家の庄、阿波の祖谷、信濃の木曾、岩代の會津とともに世人に、武陵桃源、太古の民として歌はるゝ者は、かの武藏國武甲山中の浦山村に非ずや。夫れ浦山村は秩父郡の極南、武甲山中にありて、四面山谷を以つて圍まれ、一方僅かに仙元峠を越え、西多摩郡日原に通ず、實に交通不便なる僻村なりと云ふべし。

浦山村は現今(明治二十八年四月)戸數百五十戸。(文政年間には百八十戸)。人口七百餘にして。左の小部落よりなれり。

梨子木平 大谷 日向 嶽

内案行旅學修

秩父浦山の土俗

寄國土	栗郷	伽平	武士平
大神倉	栗山	花園	下山津
上山津	細久保	金倉	冠谷
川又	家附		

以上の諸部落中余等の最も精密に取調べたるは家附、冠谷なりとす。冠谷は浦山中最も奥地にして其風俗の點に至ても比較的古代の遺風を存す。凡そ今日に於て同村の取調をなさんと欲する士はよろしく家附より冠谷の間にてなさいる可からず、若し日向附近の諸部落に於てこれが取調をなせば其風俗影森附近と大差なければ調査上得る結果實に尠なしとす。されば假令其道路の困難なるも土俗學上の研究は主として茲に深く入りて從事せざる可からず。

浦山村の始めて立ちしは何つの頃なるか、新編武藏風土記によれば、

往古石間ノ敗レニ亡命ノ徒コ、ニ潜匿セシ所ナリト傳ヘリ。今ニ長者屋敷ノ

跡ナドヨベル所アルハカ、ル人ナド居シコトニヤ

村民の祖先は何れより來りしかは今日容易に知るを得ざれ共、家附に原島姓六戸あり。西多摩郡玉川上流にも同姓數多存在するを以て考ふれば、彼我の關係あるもの、如し。降て徳川氏の世に至ては稍歴史として傳ふる所あり浦山雜記(文政年間)

御入國以前之儀は申傳も無御座候、御料に相成候事は伊奈平左衛門様御使配。寛文三年癸卯より阿部豊後守様御領分に相成申候。文政七甲申年より松平下總守御領分に相成候

確然たる傳へなければども、以上の記録に據て、推して元龜、天正以前既に茲に人民の住居せしを知るに足る。然り而して徳川氏時代に於ける彼等は如何なる有様にて生活せしや、浦山雜記には左の如く記せり。

一男は農業の暇、木を伐、薪を取、又は白はし、かき、すす、み作り、鋤柄鍛冶、炭焼等渡世仕候

一女は農業の暇、絹、藤太布等織出し渡世仕候

又彼等が産物として出すものを記して曰く、

絹、藤太布、楮、葛、等に御座候、又産物と申程には無御座候得ども漆、桃、栗、枿、かたくり、葛、屋しや、木ぶし、又は材木には栗、杉、松、檜、槻等も御座候

此地方の都會たる秩父大宮の町人は彼等に對し從來如何なる感念を懷きしや、大宮に左の如き笑話あり。

大宮にて婚姻の式有りし際

浦山より名主殿と村人數多を招き馳走として蟹の吸物を出したり。彼等は兼て蟹の吸物を出されたる時フンドシを御膳の傍に置き喰ふべしと聞き居りたりとて名主はかくなしき。村人もかくしぬ。又名主誤て芋をはさみ落したり。村人がかくなさねばならぬとてかくせり。名主飯粒を頬につけたり。村人はかくせねばならぬとて、亦一同米粒を頬につけたりとぞ。

以て大宮の住民が浦山の住民を目したる状を知るべし。

徳川氏時代に於ける浦山村氏の風俗は如何。新編武藏風土記に曰く、

村中十七區ノ内。村ノ西北寄リニテ日向ナド云ル所ノモノハ里老等ヲ始メ風俗他ニ異ナラズト云ヘドモ其餘アナタコナタニ僻在スル民ハ惣髮ナルモノ多ク髭ナドモ生ヒ次第ナルサマニテ男女トモ兩三月ノ間ニ一二度モ髮ヲ結ビシコトナキヨシ。兩色眼睛モ自ラ異ナルヤウニミエタリ。男女トモニ短褐單衣ニテ年ヲ送り漸ク寒サニ赴ケバ單褐ヲ二ツ三ツグラキモ製フノミニテ續テ挾メル衣類ナド着セシモノハナシト云。寢ルニ衾ナク冬夜ノ寒サニモ夫妻母子ミナ圍爐裏ヲ擁シテ夜モスガラ燈火ニ對セリ。シカノミナラズ常夜油ナク松根ヲ焚テ燈火トナセルヨシ。

新編武藏風土記秩父郡の部は原胤氏編し、文政八年に成しものなれば、以上浦山の風俗も亦文政頃のものなり。

さて現今の有様は如何と云ふに右の如き状態までにはあらざれども尙家附より奥地。殊に冠谷の如きは幾分か其風を存せりと云ふべし。衣服。現今は浦山村の入口の山路少しく修繕せられしを以て大宮市街との交通稍々繁くなりたり。されば大宮の物品は日々馬にて茲に輸せらるゝを以て日向邊は昔日と面目を異にせり。

二三十年以前までは浦山村一般に男女は衣服として藤太布を着用せり、而してこれを織るは全く婦女子の務とす。藤太布は主として上衣、カラサン、タツ、ケ等(是等は藍にて染めたり)に使用せられたり。今其製造法を土人に聞くに、最初山藤ヲ採リ來リ鍋ニ入レ圍爐裡ノ灰ヲ交ゼテ煮タル後コレヲ谷川ニ晒シ糠ニ入レ、好ク揉ミ、麻ニ作ルナリ。

彼等は藤太布の衣を着し、カラサン、或はタツ、ケをはきたり。然るに二三十年來は次第に此織物廢たれ、遂に今日に至ては一般衣服、カラサン、タツ、ケは木綿と變じ、一人として藤太布を今織る者なく、亦新調の藤太布を着用する無きに至りたり。余等は旅行中冠谷にて古き太布を所持し着用なし居る者多くあるを認めき(家附にて一人の老女の藤太布のタツ、ケを着せるを見たり)。されば彼等の二三十年以前に織なせし藤太布は今日最も貴きものにして。古き太布のやぶれたるに二重三重に小切れを縫ひ付け、昔がたみとしてこれを着せり。浦山人民の藤太布の上衣、カラサン、タツ、ケは何故今日に行はれざるに至りしやと云ふに、其原因は左の二件に存するが如し。

(一)藤太布を織るよりも大宮より木綿を買ひ入るゝ方經濟上利益なる事。

(二)大宮との交通頻繁となりしを以て自から藤太布の衣服を着するを好まざる事。

結髪。女子に就ては充分聞くを得ざりしも、男子も昔日は結髪にて、明治十八

九年の頃漸く散髪とはなりたり。

履物。下駄稀にして、多くは草鞋と草履なり。草鞋に四ツ緒、二ツ緒あり、草履草鞋ともに藤の皮にて作りたるものあり。

浦山村民は山林に行くの際には必らず腰にナタを帶ぶ、ナタは木の鞘に收む、

木の鞘は恰かもアイヌの Tashiro の鞘の如く兩面より薄き木片を附合せ、櫻の皮を以て綴ちたるものなり、これを腰にするには紐を帶の上に結び下ぐ。嗚

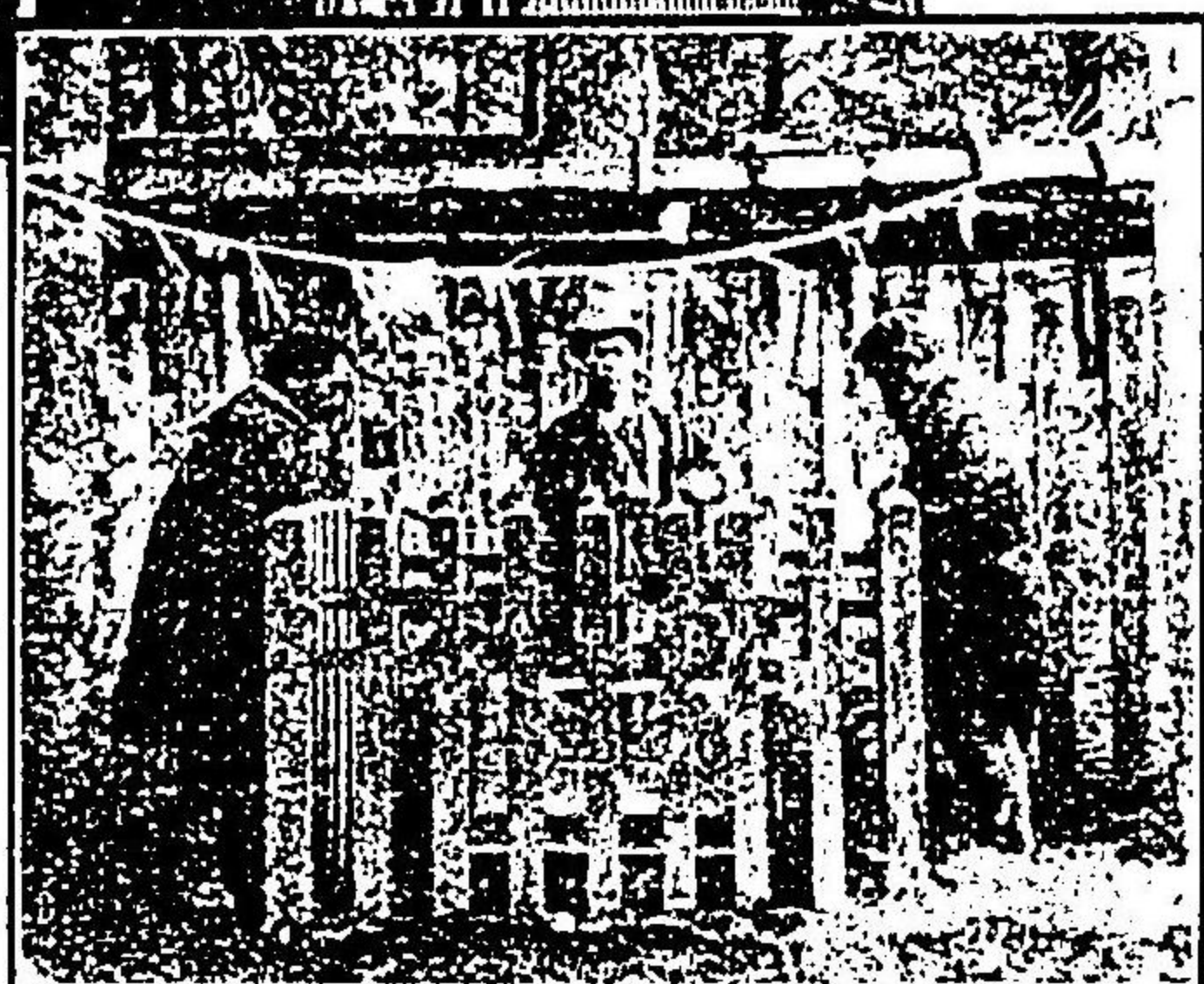
呼二三十年も前に浦山に赴きしならば、藤太布の上衣を着、藤太布のカラサン若



下總 金谷妙袋の景



香取神宮



鹿島の要石

しくばタツ、ケを着け、腰に櫻の皮まきのナタを下げし人物を實地に見るを得しならんに、今は其風。跡を絶ちしは遺憾なり、この有様實に好く埴輪土偶の風に似たり。

●食物。彼等の食物は如何、村人は麥、粟、稗、蕎麥、大豆、小豆、里芋、朝鮮稗、菘蕪、豌豆、黍、等を作り、山葵を採り來りて家の傍に植ゆれども此他自然生の物を食物とする事敢て尠なしとせず、今彼等が山林に繁殖せる植物、谷川に游泳する魚類、山中に棲息せる獸類等より撰みて食用とするものゝ大概を記せば左の如し。

先づ植物の方より例記すれば

クリ、カキ、ナシ、モ、クルミ、ムネ、スモ、トチ、ナラ、カヤ、グミ、

イチゴ、アキビ、ブドウ、カッラ(クツの事)、スノミ、セリ、ミツバ、ヨモギ、ノゴボウ、ウド、トゴツバ、ミツナ、フキ、イタドリ、コマノヒサ、サルカブラ、ユリ、ノビル、アサツキ、ニラ、ジチンジョウ、ホド、タラ、サンシヨウ、シイタケ、マツタケ、コウタケ、イワタケ、シメジ、オホクロシメジ、一ボンシメジ、ネツタケ、マイタケ、シ、タケ、キクラゲ。

動物は

ヤマメ、イワナ、カジカ、ウナギ、サンシヨウオ、カワズ、カニ、シマヘビ、ヂバチゴ、ミツハナ、ガン、カモ、キジ、ヤマドリ、ハト、シギ、タカの類、(小鳥は略す)、鹿、カムシカ、猪、狐、狸、兎、ムジナ、熊、リス、テン等。

浦山人民一日の食は朝、晝、夜の三回にして、其常食とする所のは、麥の

引割若くば種、アヅキ、粟等の粥に過ぎず、尙間食として粟、信州芋(ジャガタラ芋)等を喰ふ、而して彼等の菓子と思ひをなして珍重し喰ふものは粟をアソとし、餅草と小麥とをねり合せて皮となせる饅頭(山林に入りし際辨當の外餘分にこれを喰ふ)若しくは木の實(ブナの實、クルミの實)等なり、白米の如きは正月、鎮守の祭、其他吉凶、病氣等の際これを用ゆるに過ぎず、而して此白米は大宮より馬に駄して困難に困難を加へ茲に輸するなり。

住居。彼等の住居は如何、新編武藏風土記に曰く、

民居ハ十七區ニ別レ山ノ中腹ヲ鑿チ石ヲ疊ミ又ハ巖ニ倚テ構ヲナセシアリサ
マサナガラ石壁ノコトク或ハ五六尺或ハ八九尺ニシテ級階ヲナセルモノ二段
三段ニ及ヘルアリ。(中略)地狭ノ所ニ至テハ家屋鱗ノ如クニ比セリ夫ヨリ後

山ノ人家へハ相隔ルコト高ク三四町ニ及ビ、又前溪ニ舍スルモノハ低ク二三町隔テリ。或ハ谷川ヲ越エアナタノ半嶺ニ住マヘル民家へハ七八町若シクバ十町モ隔リタル所アリ、コノ境モトヨリ他村ヲ距ルコト遠クシテ一區ノ邊土ニテ他ノ往來ト云ヘルハナク只西ノ方久那村ノ境ヨリ一方口ナリ。

「山ノ中腹ヲ鑿テ石ヲ疊ミ云々」とは全く家屋の地盤を記せしものなり。浦山村は山間の土地なればかくせねば家屋を建つ可き平地を得べからず、余が旅行中殊に其地盤たる石壁に付て頗る危きに驚きしは細久保なりき。

家屋は今日浦山村に於ては少しく大宮邊にならひて同一の構造と成れり、されど屋根は單に屋根板にて葺き、其上に風に飛散せざる爲め小石を幾個ともなく積み置くのみ、瓦葺の家屋は浦山には一軒もなし。

浦山村には昔日の家屋の其儘残り居るも多し、これにて同村に於ける以前の建築は推知せらる。

室内には圍爐裏あり、寢床あり、余等に取りて最も面白く感じたるは其屋根なりとす、屋根は葺くに山竹、葦ガヤ、ス、キ等を以てせり、かの萬葉集の「はたすゝきをばな逆ふき黒木もて千木造れる家は萬代までも」とあるは斯るものなる可し、而して屋上には必ずチギ(方言キ、レと云ふ)を置く。

チギを置くは我國古代の風にして、祝詞式にも「天高原爾千木高知氏。皇御孫命乃端能御舌舍仕奉氏天御蔭日御蔭登隱座氏」とあり。亦夫木集にも「きみが代は山田のはらに、たつ千木の、千度かはらん、ほどはかきらじ」とあり。

このチギを上ぐるの風はたゞにこの浦山而已に止まらず。諸國の僻村にも發見

する所なり、都會にては僅かに神社に存するに過ぎず。
余等は秩父郡小桂村眞言宗の某寺の屋根にチギを上ぐるを見たり、他にても同
例一二箇所を見き、通常寺院は瓦葺なるにこの地に於ては草葺しかもチギを上
ぐるが如きは注意すべきことなり。

海山村原島由太郎が家の構造は都合二部よりなれり、一部は寢間、圍爐裏兼帶、
一部は物置場とす、柱は悉く丸木の堀立にして、屋根は枝木を幾本となく組合
せ、其れにツガの皮を葺く（ムナギ、ウツバリは丸木）而して是等を結ぶには
一切藤カツラを以てせり。戸並に牀板などは奥山の一枚板（松）にて屋根のツガ
の皮の飛散せざる爲め丸木、大石を以て押えとす、又釘を用ゆる事絶てなし、
家の高さは一間、間口三間餘、奥行一間半にて一方は山腹を少しく堀り込み石

を疊みたる所に接せり、この所に藤カツラにて一枚板の棚を二段、三段につけ
下げ、上棚には神を祭り、下棚を日用器具置場とす、地面には單にムシロを敷
きたる家をも見たるが、此所は地上に丸木を据ゑ、其上に一枚板を幾個ともな
くならべて牀板と成し、其上にムシロを敷けり。

○我國の古代に在つては一般に器具充分ならざりしを以て、木の葉をば器具に
代用し、或は之を物包みとはなしたり、かの夫木集の「かみやまの、かしはの
はのくぼて、さしなから、おひなほる身の、さかゆべきかな」とあるは則ち是
なり、浦山にては今日と雖も其の風あり、假令は神前へ圍子をさゝげ、或は物
を包むには木葉を用ゆ、前者はホウの葉を以てし、後者は（多く油揚げを包む）
ナラの葉を綴り合せ用ゆ。

○獵人熊、鹿などを捕りし時には、殺したる動物の生肝いきどを取り出し山の神ヤマノカミに供へ左の唱へをなすと云ふ。

スワノモン、マイコノモン

若し熊を殺したる時は、後にて盛なる祭をなすとぞ。

○シラカンバは浦山村にあれども、村人は之を使用する途を知らず、日光の山ニギハヤヒ間にてはこのカンバの皮を松明たきまろとすれども、此地にては煙草のクキを以て松明とす。

○骨董集こつどうに桑名近傍くはなちかくにてなす九月九日の髪葛かづらにこの圖あり、浦山村にても女わらへはヒイナ草もて男女の顔を作り髪を結びもてあそべり、蓋し古風ならんか。

○我國古代一般に木器きのうつはを用ゐしことは、皆人の知る所なり、此地にては木器を

使用せるもの多し、殊に村人が祭器として神前に供ふる高坏たかづは最も古風を存するものと云ふべし、これは木挽こびきの手になるとぞ。

○いにしへ鐵器てつぎの充分行き渡らざりし際は、木器に凹みを付くるは多く火の作用にてなしき、こは足利時代になりし畫を見ても充分考ふを得べし、此地にても今の椀わん、玩具おもちゃの臼等うすは火にて焼き凹むるなり。

○小供の玩具には、(一)コマ、(二)山吹の心を巻きて竹に差せしもの(方言ツク)、此他の玩具はヒイナ草の髪結人形、白杵等なり又クルミ、トチなどの實をも弄ぶ。

○浦山にて祭禮の時に行ふ「獅子舞」あり、こはたゞに浦山のみならず、秩父郡は浦山及び三峰、西多摩郡は留浦、川野峰、小河内、氷川、川野、原、堺、日

ツ原、白丸、棚澤、小丹波、川井、檜ノ原、小岩等にも行はる。

○浦山村人民の墓場は如何なるものなるや、新編武藏風土記には單に「婚禮喪祭ノ如キモ疎薄ナルコト推テ知ンヌベシ」とのみありて、別に精しく記するなし、余等は浦山の最も僻村なる冠谷にて墳墓を調査せしに。今日普通の墓と性質を異にせる事を發見せり、乃ち墓場は中央に自然の丸石を掘据る之を圍らすに小石を以てせり、而して其中央の墓標たる丸石には文字を彫む事なし、唯卒都婆(木の枝を少しく切り之に佛號を書したるもの)に戒名を記しあるのみ、余等は此墓標は或は古代の遺風ならんかとの疑を懐く者なり、其理由左の如し。

(一)自然の儘の石を中央に立て墓標とし、其周圍に同様の小石を以て垣を造る事。

(二)墓標にゴボウシメを掛くる事。

(三)神前に供するケヅリ花を墓場にたつる事。

是等皆佛式埋葬の行はるゝ以前の風の如し。

○寺院は昌安寺、陽岳寺、慈眼寺、薬師堂(悉く曹洞宗)などあれども皆元祿以後の創立にかゝりし者の如し。其以前は抑も如何にして葬儀を行ひしや、余等は此の問題に向ては明答をなすを得ざれども、今日埋葬上に於ける事實よりして考ふれば恐くは、日本舊來の埋葬法に従ひしものならん。現今葬送の際に婦人は結髪をオシマゲに變じ之を麻繩を以て結ぶ。衣服は白無垢なり。

○他地方にてはシメの制亂雜なるが如くなれど浦山村にては一定せり、此所のシメには三種類あり、(一)七五三シメ(二)チラシシメ(三)ゴボウシメ、而して

第一種は主として歳神、大神宮、荒神の神前及び住居の内側に結び、第二種は竈場などに結び。第三種は馬舎、雪隠、墓場、門松等に結ぶなり、尙面白きは山の境、又は山の神に供する爲めにワラ四五本を一端にて結びたるもの若しくは白紙をひきさきたるものを木の枝々に掛くる風もあり、墓場にシメを結ぶが如きは蓋し古代の遺風にあらずや。

○シメと共に浦山にて面白きは削り掛けなり、而してこれも亦他地方と異なりて其制一定せり、同地方の削り掛けには三種あり、第一種は七五三シメ及びチラシシメを結べる所にさし、第二種はゴボウシメを結べる所にさし置くなり、第三種は八尺餘の木に十二、十三、或は十六削り花をなしたるものにして、これは神棚に供する而已なり。されば第三種の削り掛けの他はシメに關係あるも

の如し。浦山にて村民に何が故に削り掛を作るやを聞きしに、彼等は「五穀豊穰を神にいのる爲めこれを神に供ぐるなり。名稱は一般にハナと云ふ則ち稻、粟、稗などの穂に花の付きたる形なり、又單に丸木のみをさしたるは是實りたる形なり。通じて稻穂、稗穂、粟穂とも呼ぶ」と答へき。而してハナを削るには一定の小刀あり、これは大宮にて賣るなり、削り掛けを作る時に残りたる木片は決して捨つることなく、皆神棚に上げ置くなり、第一種、第二種のイナホが山道の水神其他の場所に立てられあるを、遠く谷間より見上ぐれば、ハナは風のまに／＼白くゆるぐ有様神さびて面白く、萬葉集十四東歌の(常陸國歌)筑波禰爾由伎可母布良留伊奈乎加母、加奈思吉兒呂我爾努保佐流可母」とあるも思ひ出さる。

巫山旅別

于 草

五千里外三年客。十二峰前一望秋。無限別魂招不得。夕陽西下水東流。

再到洛陽

康 節

當年曾是青春客。今日重來白髮翁。今日當年成一世。幾多興替在其中。

歸來

吳 季 高

萬里歸來輦路春。西湖花柳亦精神。相逢莫怪顏容改。一路風霜老得人。

得家書

明 袁 凱

江水三千里。家書十五行。行々無別語。只道早還鄉。

○旅順と修學旅行

(日露戦争實記第七十五編に掲載す)

法學博士 有 賀 長 雄

(前略)予は曩に旅順海陸の新戰場を以て軍人養成に利用し、新市街に於ける幾多の遺棄建造物を以て陸海軍の各種學校に充用すべきを主張せり、是に於て問ふ者あらん、然れば即ち旅順は將來軍人たらんと期する人々の專有物なるか、他の學に志し業に就かんとする日本の少年子弟は旅順、遼陽、沙河、奉天の新戰場を見て、自ら益々國を利するの道なきかと、答へて曰く大に之あり、唯此道を利用すると否とは教育當局者の熱心如何に在るのみなりと、請ふ之を述べん。抑々日露の戦争は専門軍人以外の少年子弟が如何に多く實戰に與り、如何に大なる勳功を立てたるかを表證して餘あり、試に思へ孰れの部隊に於ても一年志願兵出身の將校が前線に出で、重要な任務を帯びざりしはなく、又内地孰れの

學校を顧みるも、其の官立たるを問はず、必ず數名の臨時將校を出さざりしは無きならずや、今回の戦役に於て若し一年志願兵ならしめば、將校補充の道は殆ど立たざりしなるべしとは、當局者の明言して憚らざる所なり。而して其の勤務の成績は如何と云ふに、毎號の日露戦争實記は志願兵將校の赫々功名を録せざる無く、又其の戦死負傷の比例は決して専門將校に一步を譲らず、遂には歩兵中尉市川、紀元二君の如き、工學士出身の志願兵を以て功勳中の殊勳を立て、功四級に叙し金鵄勳章を授けられ、専門軍人中に於て未だ有らざるの名譽を負ふに至る、即ち軍功は決して専門軍人の特有に非ざるなり。尙ほ又近ごろ時局の進行に従ひ、新に勅令を發して後備役の範圍を擴張し、國民役の任務を重くせられたるに就きては、既に一科専門の業を卒へて實務に就

く人の男子にして臨時隊伍に編入せらるゝ者極めて多く、戦後日本が大陸に於て新に得たる地位を維持せんが爲めに將來に於ても兵役義務の範圍は決して縮少せらるゝこと無く、却て益々擴張するの必要あるべきを思へば、軍人以外の少年子弟にも有らゆる機會を利用して軍事教育を授け、尙武氣象を養成するの必要は明瞭なるべきなり。夫れ然り軍人以外の人士にして戦場視察を許可せられたるもの少なからず、其の多くは在野の政治家にして、又時に企業家あり、彼等の着眼する所固より重要ならずと云ふに非ざるも、慘憺たる新戦場の光景は必ずしも政論の好材料に非ず、兩軍接戦の地點は必しも商工業の中心に非ず、堂々たる帝國の代議士にして遺利を新戦場に求め、或は旅館を興し、或は砂金採集の權を獲んとして軍

學校を願みるも、其の官立たるを問はず、必ず數名の臨時將校を出さざりしは無きならずや、今回の戦役に於て若し一年志願兵ならしめば、將校補充の道は殆ど立たざりしなるべしとは、當局者の明言して憚らざる所なり。而して其の勤務の成績は如何と云ふに、毎號の日露戦争實記は志願兵將校の赫々功名を録せざる無く、又其の戦死負傷の比例は決して専門將校に一步を譲らず、遂には歩兵中尉市川、紀元二君の如き、工學士出身の志願兵を以て功勳中の殊勳を立て、功四級に叙し金鵄勳章を授けられ、専門軍人中に於て未だ有らざるの名譽を負ふに至る、即ち軍功は決して専門軍人の特有に非ざるなり。尙ほ又近ごろ時局の進行に従ひ、新に勅令を發して後備役の範圍を擴張し、國民役の任務を重くせられたるに就きては、既に一科専門の業を卒へて實務に就

く人の男子にして臨時隊伍に編入せらるる者極めて多く、戦後日本が大陸に於て新に得たる地位を維持せんが爲めに將來に於ても兵役義務の範圍は決して縮少せらるること無く、却て益々擴張するの必要あるべきを思へば、軍人以外の少年子弟にも有らゆる機會を利用して軍事教育を授け、尙武氣象を養成するの必要は明瞭なるべきなり。夫れ然り軍人以外の人士にして戦場視察を許可せられたるもの少なからず、其の多くは在野の政治家にして、又時に企業家あり、彼等の着眼する所固より重要ならずと云ふに非ざるも、慘憺たる新戦場の光景は必ずしも政論の好材料に非ず、兩軍接戦の地點は必しも商工業の中心に非ず、堂々たる帝國の代議士にして遺利を新戦場に求め、或は旅館を興し、或は砂金採集の權を獲んとして軍

凡の間に奔走するが如きに至りては殆ど其の可なるを知るに苦しむなり。凡そ此等の人士は將來の軍事に關係する所なく、剩さへ心性既に固結し、新音の現象を視て新奇の感化を受くると少なし、之に反して、學業の中途に在る少年子弟に至りては、感受力尙ほ鋭敏なるが故に、同じ郷里より出身したる將卒が百戰して遂に堅を抜き強を挫きたる形跡を眼前に視るときは、其の腦裏に不磨の印象を銘し、爲めに大に發奮して、自ら他日の奉公を誓はずんばあらず、而して此等の少等子弟は近き將來に於て日本國民の基幹たるべきものたるを思へば、此新戰場を利用して彼等の一事は戦後の國運を維持する爲めに決して輕々看過すべきものに非ざるを知るなり。

千歳の下に古戰場を過ぐる、既にして一種言ふべからざるの感慨あり、況や陣

氣未だ散せず、鮮血尙ほ腥き新戰場をや、昨日まで里侶郷伴の間に在り、父兄を助けて孜々として家業を營み、地方生活の安樂に鼓腹して餘念なかりし男兒が、一朝召集の令に接するや、奉公の一心に身血沸き萬歳の厲聲に送られて倥傯入營し、具さに行軍の辛苦を嘗めて一點不平の色なく、所屬部隊の一たび重要の任務を受けて戦闘に立つや、唯だ隊長の號令あるを知つて自己の生命あるを知らず、險に臨み危を冒し死に就くと歸するが如きは即ち皇軍の勇猛なる所以にして、個々臣民と國家生存との間に密接不離の關係ある所以を指物的に教示するもの實に此の一事の如きはあらず。即ち新戰場は此の壯大なる活劇の大舞臺にして、此の重要な指物教授の大教場なり。近き將來に於て戦勝帝國の基幹たらんとする少年子弟をして忠君愛國の何たるを知らしむる所以のもの、

新戰場に優るの良效場は復有るべからざるなり。

夫れ然り、皇軍轉戰の地域は既にして廣く、新戰場は枚擧の遑なしと雖、要するに旅順、遼陽、沙河、奉天は其の最大中心なるべく、就中旅順は陸海聯合の新戰場にして、海正面には閉塞隊苦戰の跡あり、陸正面に敵の永久工事頗る多く、之に對する激烈なる攻城戰は半歳の久じきに互りて最も多くの形物に其の痕を留めたり。且又旅順は其の地位よりするも内地船舶の往來に便なれば、學生の戰場旅行に於て指を第一に屈すべきものたるを疑はず、幸にして陸正面に於て攻圍戰の爲めに破壊せられたる各砲臺は今直に之を修繕せず、現狀を保維して、成るべく多くの人士に縦覽せしむる筈なりと聞く、蓋し破壊せられたる砲臺を修築するの費用は新砲臺を築造するの費用よりも却て大なるが上に敵に

於て其の地理其の構造、其の強點弱點を知悉するが故に、之を修理して再び實用に供するは固より策の得たるものに非ず、宜しく防禦線を他に定むべきは軍人を俟たずして知るべき所なりとす。

是を以て余は内地各高等學校、公私専門學校及爲し得べくんば重なる中學校の學生をして適當なる指導の下に此の旅順に向て修學旅行を爲さしめんことを主張するものにして、其方法は成るべく出征軍人の戰地派遣と同一にし、隊伍を立て、長上を定め、汽船を以て之を輸送して、海上旅行及船内生活の實況に慣れしめ、鹽大澳若しくは柳樹屯より上陸して軍隊上陸の形勢を察せしめ、兵站線路を歩行して大陸行軍の困難を知らしめ、原野に幕營し又或るときは醜穢なる支那家屋に舍營して陣中の不自由を経験せしめんとす、而して先づ旅順附近

の地勢より講究を起し、専門將校を煩して攻圍戰當時の實況を聽聽せしむべし、旅順守備隊の將校は必ず喜びて其の事に従ふべく、事若し余の此の地在勤中に在らば、余も亦進んで諸君を嚮導すべきなり。

若し夫れ時機の問題に至りては學生の戰場旅行は媾和成立の後に於てするの適當なるや論なしと雖、若し持久戰爭の状態に移り、北海艦隊も魚腹に葬られて海上安全なるに至るは、必ずしも戰爭の終局を待つ必要なく、我軍の軍事行動を妨げざる範圍内に於て、戰時旅行を爲さしむるは亦一層の興味あるべきなり。

學生
必携
修學旅行案内完

明治卅八年八月五日印刷
明治卅八年八月八日發行

(修學旅行案内)

定價金四拾五錢

著作
所有

著者 八木 奘三郎

發行者 大橋 新太郎

東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 水谷 景長

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博文館印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地

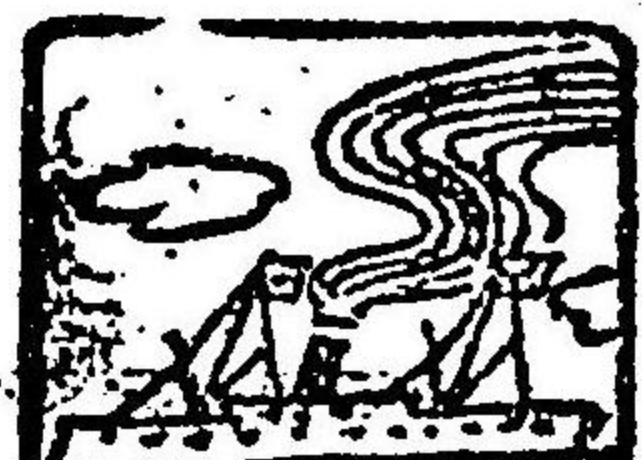
發兌元

東京市日本橋區
本町三丁目

博文館

坪谷水哉君著

兩卷共銅版刷市街精測圖二十餘葉、寫真銅版八十餘面、及全國各半部詳密着色大地圖添附



日本漫遊案内



上下二册洋裝中判總ク
ロース金文
字入美本

訂正再版

▲正價一册金壹圓宛 郵稅一册拾錢宛

上卷

日本東半部

東山道 ● 東海道 ● 北陸道 ● 北海道

下卷

日本西半部

近畿 ● 中國 ● 四國 ● 九州 ● 琉球及臺灣

發兌元

東京市本町三丁目

博文館

大橋乙羽君著

全二冊洋裝
袖珍類美本

千山萬水

全一冊

續千山萬水

全一冊

正價一冊金五
拾錢郵
稅一冊
拾錢宛

本書は辱くも九重の聖覽を賜ふの榮を得
前古稀有の美本として内外の喝采を博し
發賣以來既に十七版を刊行するの盛運に
會す各地の名山古蹟勝景等優美なる色刷
寫真版數百景を挿入して一々懇切に詳述
したれば一面完全なる旅行案内たると同
時に婉麗なる大文章なり而して前編には
東北地方を記し續編は西南部を專叙せり

田山花袋君著

南船北馬

全一冊

續南船北馬

全一冊

正價四拾錢
郵稅六錢
正價廿五錢
郵稅六錢

隨處に感興を作り到る處に詩想を着する
は花袋氏の紀行なり、殊に氏は暗勝の見
に富みて殘山剩水處として至らざるなく
探らざるなければ、其紀文は珍談奇話百
出して或は溪村の夕或は深山の夜或は怒
濤岸を嘯むの邊或は山中の湖畔など他の
紀行文に見るべからざるの趣味あり。

第壹卷 關東

相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野、伊豆七島及小笠原島

都市彩色地圖拾葉、寫真銅版貳百餘圖、紙數九百卅頁

●正價貳圓五拾錢 ●小包送料拾五錢

總論

第一編 地文

- ▲第一章 地形
 - ◎概説◎相模◎武藏◎安房◎上總◎下總◎常陸◎上野◎下野
- ▲第二章 海洋並に海岸線
 - (一)相模灣 (二)東京灣
 - (三)太平洋沿岸(四)海流並に潮流
- ▲第三章 地質
 - (一)汎論 (二)三波川系
 - (三)古生大統 (四)中生大統
 - (五)新生大統 (六)噴出岩
 - (七)溫泉
- ▲第四章 氣候

第二編 人文

- ▲第一章 沿革
 - (一)先史時代
 - (二)太古より寧樂時代に至る
 - (三)平安朝時代
 - (四)鎌倉幕府時代
 - (五)南北朝時代
 - (六)後鎌倉の時代
 - (七)諸族割據攻伐の時代
 - (八)織田豐臣氏の時代
 - (九)江戸幕府時代
 - (十)維新以後
- ▲第二章 政治、宗教
 - (一)行政 (二)司法

第三編 地方誌

- (三)軍事 (四)教育
- (五)宗教 (六)交通
- ▲第三章 産業
 - (一)農業 (二)林業
 - (三)水産 (四)工業
 - (五)鑛業 (六)商業
- 第二編 地方誌
 - 東京府伊豆七島小笠原島
 - ◎東京市◎東京府下の小都邑
 - ◎伊豆七島◎小笠原島
 - 神奈川縣
 - 一横濱市 一其他の都邑
 - 埼玉縣 群馬縣 千葉縣
 - 茨城縣 栃木縣

第貳卷 奥羽

磐城、岩代、陸前、陸中、
陸奥、羽前、羽後の七ヶ國

石版彩色地圖八葉
寫真銅版百七十圖
紙數九百六十頁

●正價貳圓五拾錢 ●小包送料拾五錢

總說

第一編 地文

▲第二章 地形
◎概論◎磐城◎岩代◎陸前◎陸中◎陸奥◎羽前◎羽後

▲第二章 海洋並に海岸線

(一)太平洋沿岸

(二)津輕海峽及陸奥灣

(三)日本沿岸

(四)海流近時に於ける 重要なる

地變
庄内地震、陸羽地震

三陸海嘯

▲第三章 地質

(一)汎論(二)原始大統(三)古生大統(四)中生大統(五)新生大統(六)噴出岩(七)溫泉

▲第四章 氣候

●第二編 人文

▲第一章 沿革

(一)石器時代(二)佩玉時代(三)上古拓殖移民時代(四)中古豪族勃興の時代(五)鎌倉時代(六)南北朝時代(七)戰國時代(八)豐臣

時代(九)徳川時代(十)明治時代

▲第二章 政治宗教

(一)行政 (二)司法 (三)軍事 (四)教育 (五)宗教 (六)交通

▲第三章 産業

(一)農業 (二)林業 (三)水産 (四)工業 (五)鑛業 (六)商業

●第三編 地方誌

福島縣 宮城縣 岩手縣
青森縣 山形縣 秋田縣

第三卷 中部

尾張、三河、遠江、駿河、
甲斐、伊豆、美濃、飛騨、
信濃の九ヶ國

石版極彩色地圖九葉
寫真銅版二百圖
紙數千五百餘頁

●正價貳圓五拾錢 ●小包送料貳拾錢

總論

●第一編 地文

▲第一章 地形

◎概説◎尾張◎三河◎駿河◎伊豆◎甲斐◎美濃◎飛騨◎信濃

▲第二章 海岸並に海岸線

(一)相模灣伊豆海岸並に其沿岸

(二)駿河灣並に其沿岸(三)遠江灘及其海岸(四)伊勢海及其沿岸

(五)海流及潮(六)近時に於ける重要なる地質

▲第三章 地質

(一)汎論(二)原始大統(三)古生大統(四)中生大統(五)御坂統及三倉統(六)新生大統(七)噴出岩(八)地體構造(九)鑛泉

▲第四章 氣象

●第二編 人文

▲第一章 沿革

(一)石器時代(二)上古(三)寧樂朝より平安朝に至る(四)鎌倉時代(五)南北朝の時代(六)諸族割據攻伐の時代(七)豐臣氏の時代

(八)幕府時代(九)維新以後

▲第二章 政治、宗教

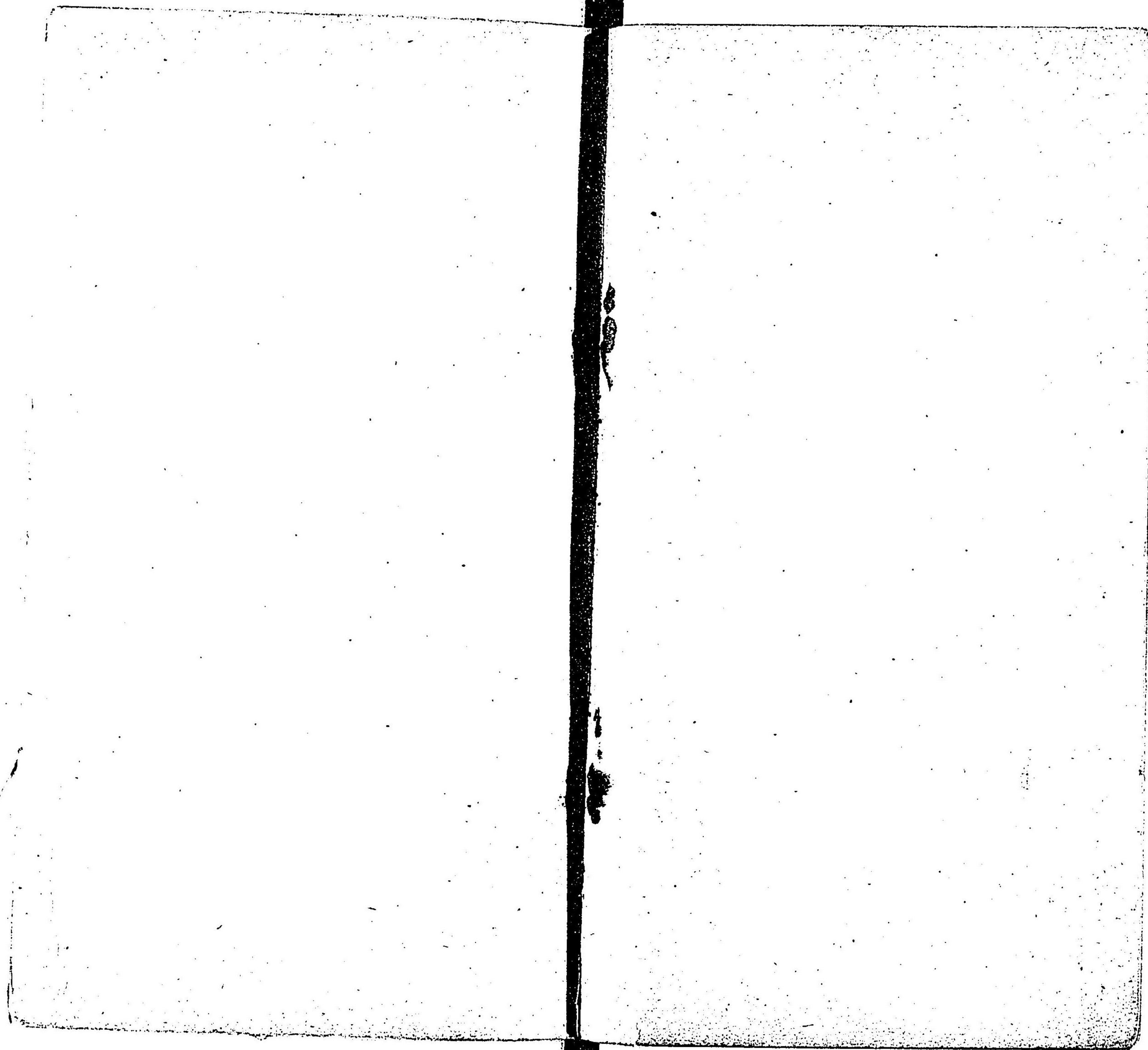
(一)行政 (二)司法 (三)軍事 (四)教育 (五)宗教 (六)交通

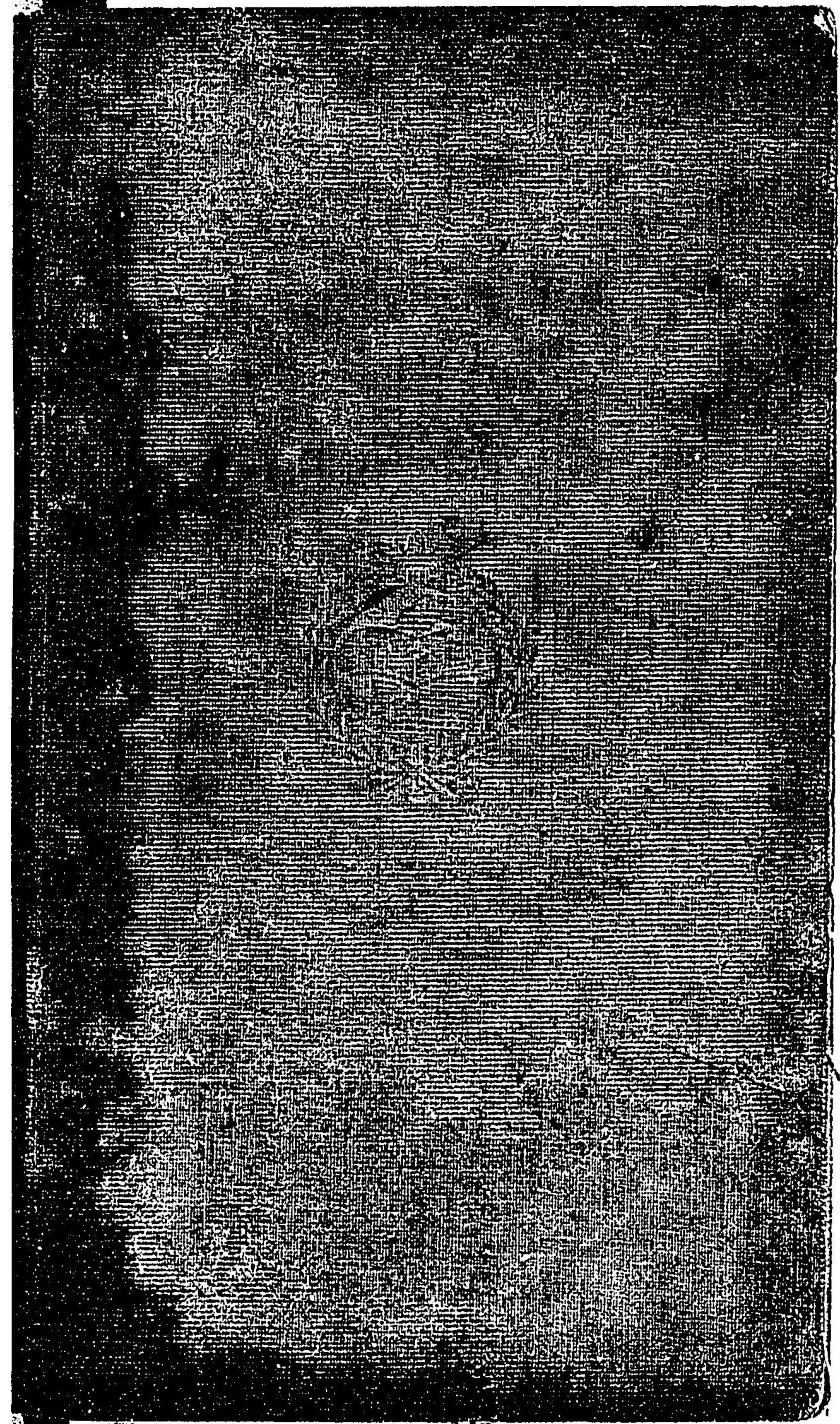
▲第三章 産業

(一)農業 (二)林業 (三)水産 (四)工業 (五)鑛業 (六)商業

●第三編 地方誌

静岡縣 山梨縣 長崎縣
愛知縣 岐阜縣





022503-000-6

特20-710

修学旅行案内(学生必携)

八木 奘三郎 / 著

M38

ADB-0174

